

越谷会田氏の研究

著者 山崎善司

越谷会田氏の研究

著者 山崎善司

始めに

越ヶ谷町、その周辺を見ますと、会田姓を名乗る人達が実に多い事に気が付きます。そして、越ヶ谷宿と言はれた近世の宿駅の中やその周辺の開発には、必ず会田姓の者が見えます。では、この会田姓の人達は、何時頃、何故越ヶ谷の地に居住したかと云う事が知りたくなるのであります。この件に関しては、すでに、越ヶ谷瓜の蔓・新編武蔵風土記稿・越ヶ谷西方旧記・静岡会田家諸資料・越谷市郷土研究会第四十回資料「大門会田家」・同第四十四回資料「会田氏と越谷御殿」・同第六十回資料「迎接院、会田七左衛門家」・「同第七十一回資料「越ヶ谷会田出羽と神明下会田七左衛門家」・同第六十四回資料・東武地方史懇明調査会会報2「近世村落的の成立」・同会会報19「越ヶ谷会田氏と越谷御殿の研究」等々で周知の如くであり、越谷市史にはその資料等総て収録して居ります。

然るに、尚又、会田氏について申し述べる事はない訳ですが、理解しがたところや、矛盾するところ等疑問点を追求して越ヶ谷会田出羽家の今一層

の御参考に供し、尚且、大方の御批判を賜れば幸尽の至りです。

信州会田郷を先祖の地として、四百二十年後の今日迄、代々語り継がれてその当主が今も尚墓参りに詣てて居る新町会田久右衛門家当主会田 幸氏に
対し敬意を表すると共に 伝承の尊さを感じ歴史的文化遗产を後代に伝へる
義務を道感する次第です。

昭和五十二年一月二十三日

山 崎 善 司

目次

第一編 本論

第一章 越ヶ谷会田出羽家の出自

一、越ヶ谷会田家は、小田原北条方とする理由

一

二、越ヶ谷会田家は、上杉方の太田氏方とする理由

六

三、越ヶ谷周辺の会田家は、小田原方系と上杉方太田方系と二一〇

流ありとする理由

第二章 越ヶ谷会田出羽家資料の疑問点

二四

疑問一 天正以前信州会田郷より来る

二四

疑問二 罷越住居、落居 数居

二五

疑問三 三條斎資正「資」の字を授く

二五

疑問四 越谷入居の時期

二七

疑問五 天正年中越ヶ谷村塾居

二七

疑問六 出羽地区開発者

二八

疑問七 四町野会田太郎兵衛家

三〇

疑問八 葛西会田中務丞

三〇

第三章 越ヶ谷会田家と四町野会田家

三一

第四章 信濃国会田郷

三六

一、海野会田氏と岩下会田氏

三六

二、鎌倉・南北朝期の海野会田氏

三八

三、大塔合戦以後の岩下会田氏

三九

四、海野会田と小笠原家

四二

五、武田進攻と岩下会田氏

四五

第五章 岩下会田氏の滅亡

五一

一、武田氏の滅亡

五一

二、本能寺の変

五三

三、小笠原氏の二重回復

五四

四、会田氏の討伐

五四

五、函館会田家

五六

第二編 資料編

六三

一、広田寺縁起

六三

一、広田寺過去帳

六三

一、広田寺伝来海野冥田系図

六四

一、海野村白取神社縁起書

六七

一、会田村村史

六八

一、日本城郭全集

六九

一、西賀村召田天道山縁起書

七〇

一、静岡会田家系図

七三

一、四町野会田家系図（日押帳より）

七四

一、氏姓辞典 海野氏三家系図

七六

一、氏姓辞典 海野

八〇

一、氏政辞典 岩下

八〇

一、寛永諸家系譜会田

八一

一、寛政重修諸家系譜会田

八二

一、寛政重修諸家系譜会田

八五

一、氏姓辞典 小笠原

八八

参 考 資 料

越越市々史

東路の部登

大門会田家

越ヶ谷瓜の蔓

諺同会田家諸資料

広田寺過去帳

越ヶ谷西方記

四町野会田家且持帳

広田寺蔵滋野系海野系図

新編武蔵風土記稿

会田家備亡録

海野村白取神社縁起書

寛永諸家系譜

越ヶ谷会田出羽家と

日本城郭全集

寛政重修諸家系譜

神明下会田七左衛門家

東京府郡松本市塩尻市郡誌

小田原編年録

会田家と越ヶ谷御殿

関東戦国史の研究

越谷周辺の村落の成立

越ヶ谷会田氏と

越谷御殿の研究

第一編 本論

第一章 越ヶ谷会田家の出自

一、越谷会田家は北条方とする理由

○会田家資料六頁 市史一・四〇二頁

上路

幸久 会田小七郎 改将監

天文年中小笠原信濃守長時在信州林館之節常武田小笠原義為一門互相争威年尚矣、自享祿至天文武田信虎同時信乎小笠原長時致度及合戦、長時終為信玄失干、時避旧領信州而上京、從是從士悉流浪云々、至弘治始属北条氏康氏父子、而領武州之地焉

信清 会田中務丞属北条殿而領於武州總州之内也

三拾貫文 半役江戸下平川内
百貳貫貳百五拾又 同 葛西小岩
九拾三貫四百文 同 坂 坂家

五拾壹貫貳百五拾文 同 奥戸
以上貳百七拾六貫九百文
此内百五拾三貫五百文、改而被仰付知行後

上某 松壽丸 山城守

天正十六年戊子年家来田嶋氏有思慮而以目安捧北条殿奉行所其文曰
会田代官田嶋豊後守捧目安問、会田後家以相害付遂糺明尋、然而田嶋事会田松壽丸与可令殺害企致之由雖申上証拠無之上、後家申延有問款候 会田松壽先段被仰出如証文致陳代可走廻、此上若对会田子並後家不依之極之候者、田嶋可処致科候能々速返味万端無用違様可走廻之旨、仍仰状如件

天正十六年戊子七月十日評定衆

氏直虎乃印朱

下総守兼信

老判

田嶋豊後守とのへ

みなには一資一の字が充てられている。系
圖には又、兄会田中務丞の没後、会田氏代
言田嶋登後守と会田氏後家連をも取寄助が
起つた際、北条氏の裁許状を卷せられて
いる葛西飯塚に本拠を置いたと云られるこ
の会田中務丞家の懸當と、越々谷会田氏と
の關係も今のところこれを明らかにする事
は出来ない。

以下略

会田家傳志強並越々谷飯上記は同一内容で
あり此れを解説的に添ひ易く載したものに、
「近世村落の成立」は谷会田家を中心として
一と云う一文がありますので之を記す。

○近世村落の成立(二)会田出羽家 三〇八頁
越谷市西南部に位置する七三傳門・越谷
・大間野を一括して、正係給圖(一六四四)〇
一には越戸新田と記載がある。谷に出羽地
区と称せられて居るが、今に出羽郷と共に
其の名が伝えられて居る出羽の地名は、此
の地の開發者会田出羽の名に因んで名付け
られたものと云はれる。

現在静岡に居住して居られる越谷市御殿
の会田家系圖に依ると、会田の姓は鎌倉時
代の末期に居住して居た信州会田郷の土地
名を取って、古来よりの野原姓を会田姓に
改めたものとする。此の野原姓は、源朝明
の軍家人として勇名を馳せた源平小太郎の

系統である中世末期の戦国期、其の子孫に
会田中務丞と称する武士が居た。小田原の
北条家に仕え、武蔵の内江戸下平川・葛西
小岩・河坂塚・同兵戸に武三十拾六貫九百
文の知行地を給されて居る。 中略

其の子が会田出羽資清で一族の会田小七
郎幸久を伴って武州越々谷に住するとある
後には、当時、老練は主であつた太田三泰宗
資正と親交を重なる内、資正依り「資一」の
字を授けられたと云う。以て出羽家の子孫は
同れも「資一」の字を名に冠して居る。

と云はれるが、会田資清が、越々谷に住した
年代は、少くとも太田資正が岩槻城から
追放される永禄七年(一五六三)以前の事だ
である事疑論を待たない。

太田三泰宗は 天文十五年(一五四六)山
内鳳谷の雄力を挙げた上杉軍と、古河公方
晴氏方と、出越に於て死闘を繰返して居た
然し、川越城交戦に成功した北条氏康軍に
よつて、連合軍は再起不能に至る迄の大敗
を喫した。

川越交戦をみろうして脱した三泰宗は、
此の年の秋、武山城を奪還して此処に據つ
て居たが、父中務氏は北条時康の前鋒と見
られる利根川を下流、葛西の地に知行地を
得ち、越々谷河原には舟運を利用すれば三
浦の港地にある。然も此の地帯は、小田原
北条・吉良・三浦・河原田見・河原田三とい

った戦国大名の支配が交錯した政治的に不安定な空白地帯であったとみられる。

(註) 永禄二年小田原衆所領帳知行地分布図によると現の荒川古利根河辺、即ち葛西領以北における足立埼玉両郡内には北条氏の知行地が極めて希薄である。これは北条の勢力の及ばない政治的には不安定な地域であった事の証拠ともなる。

従って、戦略的による大名の通過の都度役夫や糧米等の露葬は、欲いままに繰返されて居たであろうが、支配関係の未熟な兵軍役・年貢其の他の諸役の課徴は確定的な物はなかつたであろう。

更に当時の越ヶ谷周辺は、利根川荒川両本流の奔走に荒廢したままの未開発の低湿地が多く、只自然と軍力の暴威に替え乍らも土地の人々は、発達した自然堤防に築壑を形成して溜池溜水に依る水田農業を辛うじて展開して居たであろう。然し、それさえも洪水に依る被害はしばしばであり天候に左右された農業経営は極めて不安定なものであったと考えられる。

以上の如く、地勢的に未熟な地域であったが故に、先に言ふは、出羽資糧がこうした諸条件を見窮めた上で、さしたる抵抗もなく領主的な存在として越ヶ谷に居を構える事が可能であったのである。

ところで、大きな地域差があるとはいえず、当時関東地方は一般に農業生産力は極めて低い後進地帯とされて居り、大名に所屬する武士階も、在郷された純軍事的家臣団として養成される迄に至って居ない。即ち、大名が多くの家臣団を養うだけの生産物代(年貢)を収取する体制も不完全であつたし、領主の権力としての軍役並に領主の手耕作としての労役といった、労働地代の課徴が主でまつた。

従って、金田源一とて本来の武士であるからと云つて、戦国大名に位官をし、直ちに扶持や知行地を与えられるという時代ではない。浪人である以上、自力で先ず荒地を復興させたり、未開発な土地を開拓する等して、農業経営の拡充と安定を計る必要があつた。そして、實力を備えた上、領主としての基礎を確立させる事が先決である。自力と言つても、勿論現在考えられる、婚小家族による独立した農業経営は到低考えられない時代である。その多くは名主百姓と云はれる村落の有力者を中心とした家族長(約)複合家族の共同形態を持ち、血縁(親族や血縁の下人所従)を主軸官とも呼ばれる(一)を駆使しての比較的大規模な農業経営を必要とした。

こうした事から、金田出羽も、単独で越ヶ谷に移住したのではない事が解る。充分

なる資力携えた上、一族部党と云うか多くの下人所従を伴って、当時政治的に地理的に不安定な土地として荒廃していたと考えられる越ヶ谷に居を構えて、領主としての農業経営に着手していった。

この間、岩槻周辺からの北条氏の後退に伴って勢力の拡大に腐心する太田三斎齋に近づき、越ヶ谷の復興の援助や便宜を受けていた事は、充分に考えられる。(弘治から永祿年間に掛けては、太田三斎齋を参謀とした上杉謙信の関東攻略が激しく特に永祿四年には、上杉勢は小田原城まで追っていた。)

ところで、越ヶ谷に根拠地を置いた会田出羽の領主としての政策や実態については化政期に書き残された風土記「越ヶ谷瓜の蔓」によってその一端が乍ら窺うことが出来る。即ち、「越ヶ谷元郷は御入国之前は至而大郷に候得共人民家屋少候而奥州通在村而候所永正年則起・岩槻乃落居併居付之者百姓も祖々有之候とは存候得共、永祿・天正之落居も多集り村内取立候内、大坂落居も遠来凌申候、別而御入国後依繁昌に成相り、以下略

斯切く戦乱打続く時代の變遷と共に、奥州街道筋の爲一途々落居之者斯遙来」とある爲に集り来て、居付百姓十七家と共に、村に相成ったと記してあります。

「会田家備忘録」には、「越ヶ谷会田出羽之偽、御入国依の大家に而御殿高場に陣屋住居致、今袋町入口依左之方出羽屋敷道通り也」とあり、御殿地に広い屋敷地を構えて居り「頭家は青会田出羽手前仕置者理手候場之由」とあり、裁判や刑罰も出羽が自由に行って居たと見える。又「越ヶ谷瓜の蔓」には、「姓名会田と申会田出羽依許領之名字に而之有由」又「本陣名主問屋三役兼帯之家柄、本姓三嶋氏之処越ヶ谷会田出羽依一同七人開起之者同姓に相成り、八右衛門と相名乘居申候」と云う記事もあり、戦乱に主家を失い主地を追はれて、越ヶ谷の地に忍んで来た没來の士や、近在の有力百姓に同姓を与えて此れを一族關係に組入れ、会田家を強め様とした様子も見える。斯て出羽は、川口より越ヶ谷、戸塚、大門、岩槻方面え連なる武蔵野台地の麓に亘々と展開する湿地帯に掘さくして、湿地の干拓を計った。それを出羽堀と云う。そして、開発に努めた地域は今の七左衛門、越巻、大宮野の地て出羽地区と呼ばれて居る。

中略

ところ起、出羽賢清は領主として成長して行く事業の中はにして、天正十七年(一五八九)八月三日に没した。「法号・奇教院殿奥吉和敬居士」と云う。

以上之如くて越谷市天も時岡会田家資料や

同系圖並に会田家備忘録と越ヶ谷風土記、そ

して、「近世村落の成立・越谷会田家を中心

として一等款多く資料があり、現在の越ヶ谷

の会田家の出自に付いては、此の説が大勢を

示してゐりますし、又明確なる資料があり、

越ヶ谷会田出羽家は小田原北条方とする理由

である。

二、越谷会田家は上杉方太田氏方とする理由

○越ヶ谷風の裏 市史四・三二一

越谷中町会田出羽家は、天正以前海野小
太郎太信州会田より郎等六家同道に而罷越
候大家に而御殿高場に陣屋住居致今袋町入
口より左方之出羽家致通也、越谷七家老
草創に而其他越谷居付百姓拾七軒之旧家有
之由申伝信七、云云

中略

○越ヶ谷風の裏 市史四・七二頁

中町住

中町大屋敷会田五郎兵衛義正徳年中より
平保初年に至退任に及候に付、大沢町嶋根
番兵出振勤末候、元来会田出羽家は海野小
太郎子孫に而信州会田より天正年中越谷村
へ墾居、越ヶ谷領一円に所持致居候処

以下略

以上之如く、越ヶ谷会田出羽は、六家同道
にて「信州会田より来る」とあり、信州より
来た事になる。されば、その時期は、何時頃
かと云う事である。

○時岡会田家資料七 市史一 ○

前略

資清 会田出羽

父将監伴信信州致武州越谷而信住于此所
往年因太田美濃守資政後号三泰齋与会田
氏加懇意而親故授資之字、依自是子孫用
資之云云天正十七己丑年八月六日卒号、
喜教院殿吳菩提敬居士

資久 会田出羽
下略

以上の如く、六田三系斎資正加慈親しきにより「資」の字を授く、依て是子孫資之字を用うとある如く、天文十六年（一五四七）十月岩槻城主となりたる時より、永祿七年（一五六四）七月嫡子氏資の爲に岩槻城を追放になる迄の十八年間と云ふ事になる。

資清は天正十七年卒とあるので、天文十六年（一五五七）より天正十七年（一五八七）迄四十三年間でありますので、今仮に六十五才で卒したとして、天文二十二年（一五五三）落城の年代では、二十九才であり、年代的にも比定出来る。

（注）天文二十二年落城とは、武田信玄に攻められ会田の城が落ちた時である。後述参照。

それでは、天文十六年自、永祿七年迄の間で会田出羽資清が信州会田郷より、故郷を捨て、関東の他国領内へ、六家同道にて罷越すとある如く、移住して来るからには、所領を失うとか、新領仁地に赴くとかの旅程の事が

ない限り、有得無い事で、大事件がなければならぬはずである。

会田の本領である会田郷は、信濃国東筑摩にあり、当時天文年代を見るに、甲斐の武田信玄晴信と信濃府中の小笠原長時と相争い天文十七年樺尻峠の戦に小笠原長時敗れ、天文十九年（一五五〇）七月十五日府中の林本城に落、天文二十年（一五五二）十月平瀬城攻之割り、同二十二年（一五五三）会田麻新方面の掃討始り、三月二十九日刈屋原攻、四月二日城主太田長門守資忠生捕、塔ノ原の城自落、四月三日会田盛至辰山迄放火、刈屋原・会田敵城を討り、西の刈刈屋原向宍の方御嶽立、等々。高白斎記・千曲の真砂・信府統記に記してある。

小笠原長時は信州府中林大城自落の後家臣等を逐して、難を逃れる爲に、上京した。又岩下会田氏については、天文十九年（一五五〇）九月犬甘城を放棄した後、「会田岩下三三三に下り出陣した」と京筑摩郡誌四・九

四五頁にあるが、天文二十二年（一五五三）四月三日の会田虚空蔵山城記述に重複する。

（注）後日会田広政なる者会田郷に住し、武田の軍役十騎を勤めている事から、同十九年に、武田に降った会田と思はる。

此の記述を見ますと、天文二十二年（一五五三）会田の本領、会田虚空蔵山城の放火落城の時に、落忍で、関東の雄太田三浦資正を頼り、落延びてきたのではないか、と思はれる。

瓜の蔓に、「落居之節」「落居の頃」と記されているのは、此の事であろう。以上の事柄より按ずるに、越ヶ谷会田家は上杉謙信方の太田氏方とする理由である。

瓜の蔓に「越ヶ谷蟄居」永禄七年三浦資正岩槻城追の後、小田原北条家の持城となつた以後、越ヶ谷会田家は勢力後退し「蟄居」と云う字が記されている。（蟄居…家の中に隠じこもつて外出しない事。蟄…虫が地中に

こもる事の意味。）もしも、小田原北条方であるならば、越ヶ谷は小田原の支配下になつたのであるから、会田家が蟄居する必要がないので、此の意味からも越ヶ谷会田家は上杉方太田氏の支配下にあつたものと推定出来る。

此のこの状態は、北条・上杉・古河公方・里見とそれぞれ内紛を覆み目まぐるしく変遷して、その争いの上まる処をしらず、その禍中であつて尚生き伸びた事は至難の業であつた事であろう。即ち、北条家の岩槻への進出、大永五年（一五二五）岩槻城主太田資頼の時、家来渋江三郎の北条方への内応による落城に始まる、享禄三年（一五三〇）資頼は、渋江三郎を討取り岩槻城を奪還したが、天文二年（一五三三）資頼は資正時に家督を贈る。此の資正時は小田原北条方である。

天文十五年（一五四六）四月川越城を取囲んだ両上杉・古河の連合軍は、北条氏康軍の夜襲に依り大敗する。此の戦を「川越夜戦」と

云う。此の時、太田資正も出陣し、上州新田郡高林に敗走する。此の數に、岩槻城主太田資時入道は、小田原方に味方する。天文十六

年（一五五七）十月九日資時没す。（資時入道号全盛。天文十五年十月九日卒の法号月冷全盛の位牌あり。）古文書や前後關係より十六

年が妥当である。資正の城主相続については平穩なる入部ではなかつたのではない事が想定て来る。何故かと云に、その直後十二月には、小田原より北条氏出兵し、松山城を落し岩槻を囲む。天文十七年（一五四九）北条氏康と太田資正との間に和議が成立し、北条軍兵を引く。此の時、資正嫡男氏登（六才）と氏康女（三才）との間に婚約整のう。と云う。天文十九年（一五五二）、信州府中では、小笠原長時武田に攻められ、難を避けて上京す。会田家系圖には、此の時、從是徒士悉流浪す云云、である。

天文二十二年（一五五三）四月会田氏の城壁

悉く落城。会田・青柳・麻績。方平定され武田の軍門に降る。

永祿二年（一五五九）小田原衆所領役帳成る。会田中務丞・岩槻太田系四人・江戸太田系六人名所領帳に載る。

永祿三年（一五六〇）十月十九日、氏康・岩槻城主資正に対し長文の書状にて、資正の変節を叱責し味方になる様に乞う。資正は上杉謙信に与し、其の先陣を務む。巽越・松山城を悉う、武蔵の冬寺社に対し制札を發す。小田原城攻めを始む。

同年三月、資正先陣にて小田原城を囲み攻る。同月二十二日鶴岡八幡宮に禁札を下す。此の時、上杉謙信関東管領職の就任式を行う。永祿四年（一五六一）十二月には、北条軍大挙して松山城に押寄せ。岩槻城・壽能城も同じく攻められる。

永祿五年（一五六二）三月三日松山城落る

同年三月四日、上杉謙信石戸城迄教授に馳

せつけるが、一足遅く落城してしまい、謙信怒る。私市城等放火する。

永祿六年（一五六二）太田資正、兵部六韜源五郎氏資、大膳大夫に補任さる。

同年十二月、江戸太田康資、江戸城中にて無叛を企てるが、手前が発覚し、急拠岩槻城に逃げる。永祿七年（一五六三）正月元旦、兵原小田原城を出兵。国府台に戦う。同月十八日里見・太田の連合軍は大敗する。此の戦を「国府台城の合戦」と云う。

同年五月、先に（天文十七年正月十八日）氏康・資正との間に和儀成立の際、婚約した通り代資のもとに嫁入した。此の時点より、岩槻城は、小田原方の息が懸り、三系系資正味方の家臣が大方討死した後なので何処んともし得なかつた事であろう。

同年七月十三日、三系系資正・政景父子宇都宮の歸り、源五郎氏資取巻の家臣達に依り岩槻城への歸城成らず、遂に追放されてしま

った。之により、三系系資正の十八年間の岩槻在城は終り、再び小田原北条方の持城となる。

永祿十年（一五六七）源五郎氏資、側近の家臣五十三名と共に、上総の三船城外に於て、討死した。之に依り、完全に岩槻は、小田原方の支配となる。資正方の家臣にて、之に従はず残留した者達は、岩槻衆として志誠を尽させられ、厳しい状況となり、各地に戦っている。又三系等の取立や、使役等の催足等の書状等も見え、又度々の着到改めが見られるので、その詮儀は相当に忙しいものと思される。資正譜代の家臣ではない会田家は、越ヶ谷に残留したが、資正思故の家臣の故に、「鹽居」させられたと思はれる。

越ヶ谷会田出羽家が越ヶ谷に移住して来たと思られるのは、天文二十二年以後永祿七年迄の十一年間であると思られる解である。そして、永祿七年もしくは十年以後、越ヶ谷に

「盤居」と云う事になる。

天正十八年（一五九〇）七月小三原城は、秀吉に落され、同年八月徳川家康の所領となり再び御光を溶びて、越ヶ谷宿の歌吏として又旗本会田家として栄えて来たのではないかと思はれる。

以上の理由で、越ヶ谷会田家は、上杉方太田氏の会田家とする理由である。

三、上杉方太田氏方会田氏系と二流あるとする理由

一並びに二の理由を見るに、資料的な事は同一であり分別がつき悪いが、之を良く見当して見当して見ると何か「落されて」居ると思はれる。そこで、越ヶ谷以外の地に居住する会田家について見る事にする。

◎葛西会田家

静岡会田家系圖中に、「上略 会田中務丞時信 — 会田小七郎幸豊 — 大永享祿之間幸豊軍功有り — 会田小七郎幸久 弘治初北条氏康氏政父子武州の地を領す — 会田中務丞信清 — 北条氏より武州領之内江戸下平川・葛西小岩 葛西領家 葛西奥戸 — 会田出羽資清 — 生国信濃、会田小七郎幸久を伴って武州越ヶ谷に住す 下略」

此の会田家は、天又末期に成った「小田原旧記」に御馬廻衆一手百二十騎中に会田中務丞の名が初見され、永祿二年（一五五九）「小田原衆所領役帳」の中には、江戸衆八十一名中二十一番目に会田中務丞の記載が見える。此れより、五十年前永正六年（一五〇九）の作と云はれる「東路の部登」と云う紀行文中に、会田弾正忠定祐と名乗る武士詠して居りそこに出て来る善養寺と云う寺も葛西小岩に現存する。此の会田氏と中務丞とが何如なる

關係かは不明だが、此の時代すでに葛西小岩に会田弾正忠定祐が居住して居た事は事實である。

葛西の地は、今日の東京都葛飾・江戸川区に当り、古く鎌倉初期に葛西清重の領する地であり、後北条氏が此の地域に進出したのは大永四年（一五二四）江戸城を太田氏の怨寇により陥した直後であり、翌年氏綱が葛西城を攻めて居る。天文七年（一五三八）氏綱氏康父子は、下総国府台城攻めるに当り、まず葛西城を陥し、岩槻城にも攻撃を掛けて国府台合戦は、氏綱の勝利となり、葛西城も北条の勢力下に置かれたと察せられる。永禄二年（一五五九）に作られた「小田原衆所領役帳」には葛西の地の村々の名が掲げられているので葛西城が北条の勢力下にあった事になるが、永禄五年（一五六二）の本田家文書には、氏康は本田正勝に向かつて「葛西要害を兼取ったならば恩賞を与える」旨を記して居るので永

禄五年には奪還されて居たと考えられる。永禄七年（一五六四）国府台合戦に三見・太田の連合軍を敗つてからは、完全に北条軍の勢力下に入った事になる。会田小七郎幸登の項に大永享禄の間幸登軍功有りと言ふは、小田原北条家三として葛西国府台を攻めたる時の軍功かと想はれる。幸久の項に、弘治始め北条氏康氏政父子武州の地を領す、信清の項に武州領の内江戸下平川・葛西小岩・葛西飯塚・葛西奥戸とあるは、永禄二年の所領帳に記載されて居るので此の辺事情が解つて来るのである。永禄七年国府台合戦により葛西の地は安定し、鎌台は岩槻城に移り、北条軍の先鋒として同時に八条後谷・越ヶ谷等に会田家が進出して来ると見るのが至当である。

小田原万系会田家の越ヶ谷進出は、永禄七年（一五六七）七月七日三茶齋資正岩槻城追放により氏資城主となる後、諸家臣に安堵状を

発しているが此の時点か、永禄十年（一五六七）上総國三船城外に於て討死し、その後北条氏の直切支配が始まる此の時点か、もしくは、太田氏房岩槻城主となる天正九年（一五八一）以後か、此の三時点かと思はれるが、越ヶ谷会田出羽家の發起と考え合せると、永禄十年以後の二・三年間と見る。

即ち、永禄十年（一五六七）十二月二十三日北条氏内山弥右衛門に対し所領宛行う
永禄十三年・元龜元年（一五七〇）三月二十四日 浜野弥兵衛清忠卒す。（元八潮市馬場）此浜野家文書によると「所領の宛行は天文三年（一五三二）とあり一土巻出来たのは「元龜元年（一五七一）当所に来り居を定め一の古文書が残つて居る」
同年六月九日 北条氏岩槻の内山弥右衛門所領替えを行う。
同年十一月二十七日 北条氏内山弥右衛門に障夫について書を下さす
元龜二年（一五七一）十一月三十日 北条氏内山弥右衛門に、柿木川戸（草加市）の年貢受取の書を下さす。
（此の内山弥右衛門は、河越に所領替になつたか不明だが、柿木川戸とあるから此の

近くであらうか）

元龜三年（一五七二）正月九日 北条氏岩槻城の詩節に巻到狀を改めて交附す。
同年二月九日 北条氏繁六相模（越谷谷市）不動院に岩槻城堅固を祈願せしめる。

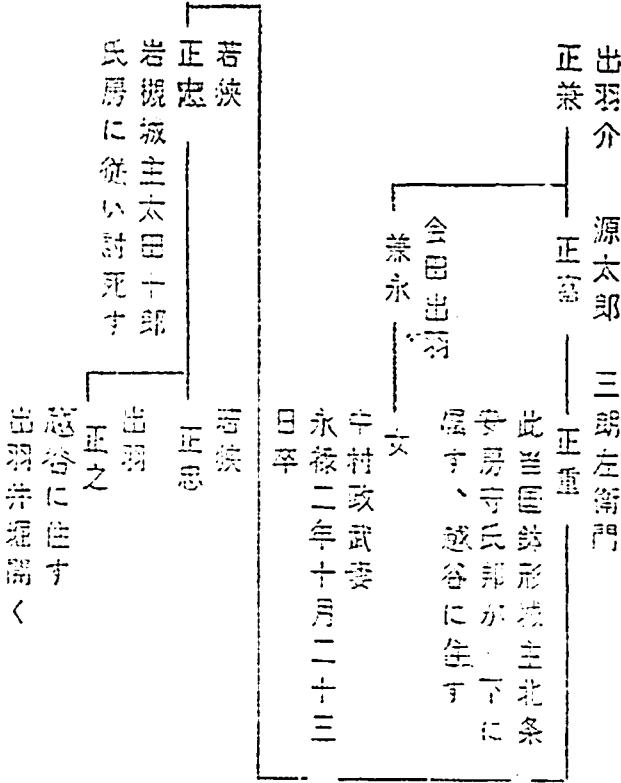
此の如く、永禄十年以後、後谷会田家も浜野弥兵衛・内山弥右衛門と同様天文三年（一五三二）頃、宛行はれ、事實上の人居は永禄十三年（一五七〇）頃と云う になる 後谷会田家も交塚の中村右馬助家に全田兼永娘嫁すとあり、永禄二年（一五五九）没とあるのは天文初年頃に、八条領の内は何等かの關係がなければ姻戚關係を結ぶ事が出来なかつた事であらう

◎後谷会田富右衛門家

新編武蔵風土記稿によると、「会田三郎左衛門正重は出羽介正兼が孫源太正富が子なり、当國並郡城主北条安房守氏邦が麾下に属し、越谷の地に住す。その子右狭正方は、太田十

郎氏房に從いて討死す。その子若狭正忠、二男出羽正之と云う。正之も越谷に住すとあり今越谷宿に子孫なし、衰微して江戸に移れりと云う。」

後谷会田家系図



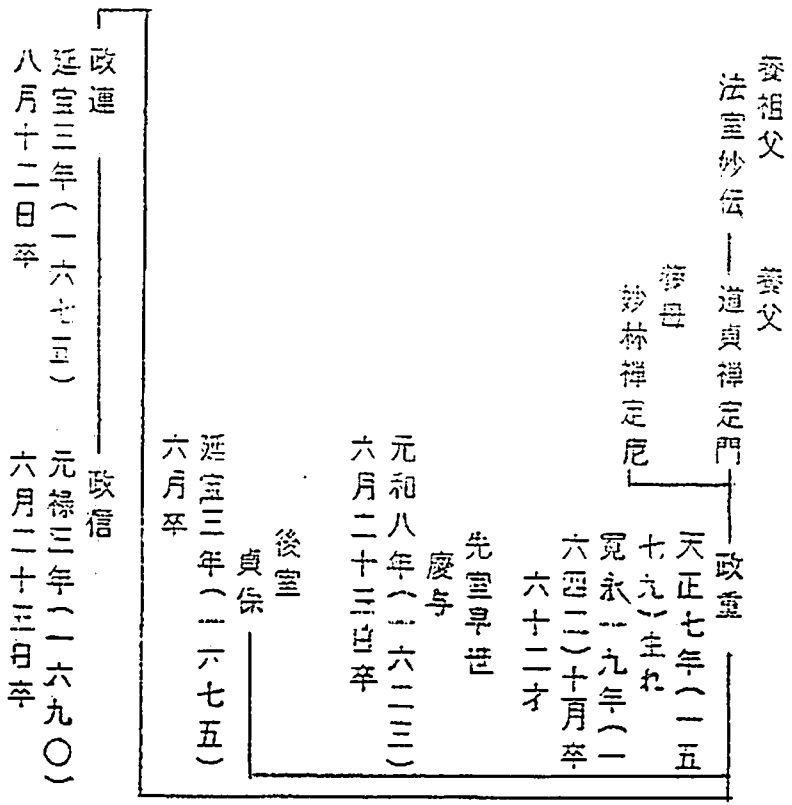
北条氏勢が鉢形城主だったのは、「永禄五
六年（一五六二・三）から天正十八年（一五九

○（遠の約三十年で、三郎左衛門正重は、此の氏那に臣属していたが、越谷に来住し、その子正方は、十郎氏房に臣属して討死したとして居るが、永禄十年（一五六七）太田源五郎氏資討死の後北条支配の持城となった頃か、もしくは、北条氏政の子氏直の弟である氏房が岩槻城主になったのが天正九年（一五八一）で、その折北条氏よりの住者として家臣が多く岩槻に来て居るから、三郎左衛門正重も陪人として岩槻城付の越谷に来住したものか、そして、若狭正方は岩槻衆の一員として出陣し討死したものであらう。「正方の子若狭正忠二男出羽正之」に付いては「新編武蔵風土記稿」の越ヶ谷宿出羽井堀の項に、「相伝う会田出羽介正之、当所に住し、短閑さしを以てかく鳴う」と載せて居るが、その祖父若狭正方は天正九年以後、太田氏房に從って討死して居るので、天正末から慶長頃の人であるうか。

◎神明下会田七左衛門家

七左衛門政重を初祖とする神明下の会田家は、「越ヶ谷瓜の蔓」に「七左衛門政重は、は、「越ヶ谷瓜の蔓」に「七左衛門政重は、七左衛門政重を初祖とする神明下の会田家は、「越ヶ谷瓜の蔓」に「七左衛門政重は、寛永の初め会田出羽表門前に捨子有之、小袖守袋短刀相帯有之、白袴の小児と拝見致候間委育致し候処、成長之後才発尋常不成、会田七左衛門政重と名付け出羽三男の逸、惣三耕地、沼袋開発致、神明下耕地住居、若八郎兵衛成人となり右新田耕地に慕す云云」とある政重は、寛永十九年（一六四二）十一月に六十二才で没して居り、此れを逆算すると元正七年（一五八〇）の出生となる。即ち、「越ヶ谷瓜の蔓」にある寛永の初めは誤りである。元正十八年（一五九一）岩槻落城の年十一才に当り七左衛門政重を委育した人物は会田出羽一族の者か、七左衛門家の位階では次の如くである。

神明下会田七左衛門家系図



右の通りで、七左衛門政重を養育した養祖父と養父母の没年や出自は不明である

天和七年（一六八三）成立の「神明縁起書」

にある「元和年中会田政重任官更伊奈氏」とあり郡代伊奈家に任へて居り、新田開発に力をそしぎ七左衛門村の名が残つて居る。

又「越ヶ谷瓜の蔓」(市史四・五二)には、「落居之項会田七家と申、元和御祿地講候者大略左に相記、会田七左衛門 出羽一族政重開発後神明した組居、伊奈家奉公」とある。

第六十一回資料二頁 神明下会田七左衛門「文化年間成立の七左衛門家八代重昌の牌には、「其先出於北条十郎氏房、有故改今姓氏」とあり、政重は北条家の一族か、もしくは、岩槻太田家の一族であり、故あって捨てられたものであると推察出来る。会田出羽に拾はれ、出羽の徒者に託されて養育されたものと考えられる。生長の後政重は、その才能を買はれ、兼て出羽親子が排水溝などを削(出羽越)して湿地の開拓を進めていた出羽地区の經營を分家創出の形で政重に託した。政重の年齢から推して多分の長の初期であつたらう。」

新編武蔵風土記稿卷二〇三

「七左衛門村 附持添新田

政重院 新義真言宗匹野村迎授院門徒月と号す。当院は、村民七左衛門の祖先会田七左衛門政重、孝慶寺禪定尼迫福の爲に造営す。棟札に寛永十九年閏月吉日とあり按に此政重と云は、会田系圖に三郎左衛門正重と云うものをのす、同人にや、さもあらは、北条十郎氏房に属せしものなり。慶譽は元和八年六月二十三日に死せり。又山号は、後妻の法名にて本尊は觀音は、政重が守政仏なりしと云ひ伝えり。」

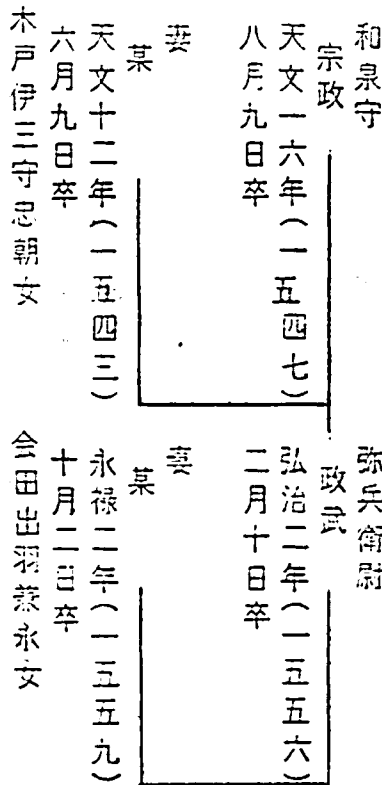
「越ヶ谷瓜の蔓」の捨て子の話しは年代の誤りの如し。先祖の位牌の内の養父養父母の改名は、たれかは今の越不明である。「且土記」や「神明下会田七左衛門家」については、太田氏一族か北条氏の一族かと云う事であるが之も確証はない。「風土記」にある三郎左衛門正重なる者と同人にやとあるが年代的に差があり過ぎて比定出来ない。

◎麦塚中村右馬助家

会田一族と関係深い麦塚の中村家について

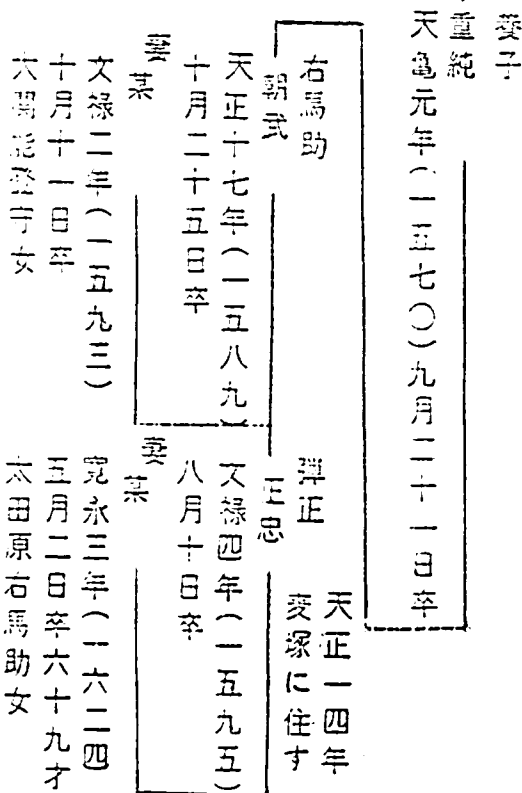
系図を参照して見ると、系図中二代政武は弘治二年（一五五六）卒、その妻永禄二年（一五五九）に卒しているが、その妻は、会田出羽兼永の娘であると明記している。即ち、風土記にある会田系図に初代出羽正兼の子当りに一族で兼永なる人物が居たか？「某が此の出羽兼永」に当るのではないか？、又彈正正忠は没年より逆算すると永禄七年（一五六四）の生れである。

麦塚中村家系図



右の中村家は小田原北条氏より降夫の事て天正七年（一五七九）に裁許状を討取り今に所蔵して居る。太田氏の旧臣（北条氏の岩槻衆）の家柄である。

「道也（氏資）出し置く証文は無くしたと雖も道也討死以来、仕未る儀候間」とあり、天正七年六月十日岩槻衆中村右馬助殿と記してあり、系図にある朝武宛であるが、氏資時代より仕へて来たとあり、天正十四年麦塚に住すとあり移住年代は不明である。



◎関宿会田久兵衛家

関宿江戸町の本陣に会田久兵衛家あり、「先祖を永禄年中、内蔵助某、後に和泉守と称す」と云う。関宿会田家には中世よりの文書を所蔵し「会田文書」として、その影写文は東大史料編算室に所蔵されている。北条氏照判物「会田文書」

船舌渡

右氏照被官船也、從佐倉関宿、自葛西栗橋往復不可有相違候、若横合之輩有之者、是先此証文後日之状如件

天正四年丙子九月

氏照(花押)

佐倉より関宿 葛西より栗橋間の通航権限を附与されたもので、関宿を中心として常陸川と大日川である。氏照の居城栗橋城は、現在の茨城県猿島郡五霞村大字元栗橋は、関宿・葛西・栗橋とは河川交通で結ばれていて葛西にも関宿にも会田氏が居た事は偶然ではない。関宿の会田氏については、「小田原編年録」巻下・関宿城の項に、「宿江戸町東陣久

兵衛が家系」とあり、永禄三年(一五六〇)築田晴助判物、年紀年霜月某氏書状の二通の古文書を掲げている。戦国期には、武士として近世に入り、商人として河岸問屋業を営んでいた様である。現代迄子孫が連綿と続いてある。此の会田家は、中務丞からの別れてあらう。永禄三年築田晴助の判物所蔵により此の時代すでに関宿に居住してゐた如くである。

◎大門会田家(第四十四回史跡めぐり資料)

本陣会田家について考察するに、会田家の先祖は、同家伝来の由緒書・先祖書等によると「永禄年中(一五五八〜七〇)、小田原北条氏の武將であつた会田中務丞であつたと云はれ、その嫡孫の会田外記が、岩槻城主と「懇意たる」により大門村宝壽山に居住したのが始まりと伝える。会田中務丞に付いては永禄二年(一五五九)北条氏が家臣団の所領役高を記した「小田原衆所領役帳」に江戸衆の一人として記載されて居る」中略

「外記の娘は、豊臣秀頼の臣、木村長門守重成の一族、木村八兵衛と婚姻を結び、牛千代を生んだ。牛千代は、母方の姓を取り、会田兵左衛門俊明と名乗って会田家を継ぎ、同家では、俊明を初代として居る。

大門村が紀川厩場に設定されると寛永三年（一六二六）俊明は、紀州頼宣公に召出され、深作村（現大宮市）の名主八木橋七兵衛と共に鳥見役を仰せ付けられて居る。」

会田家は鳥見役と共に、本陣・名主役・問屋を兼帯する。大門宿の要職を一手に引受けている。

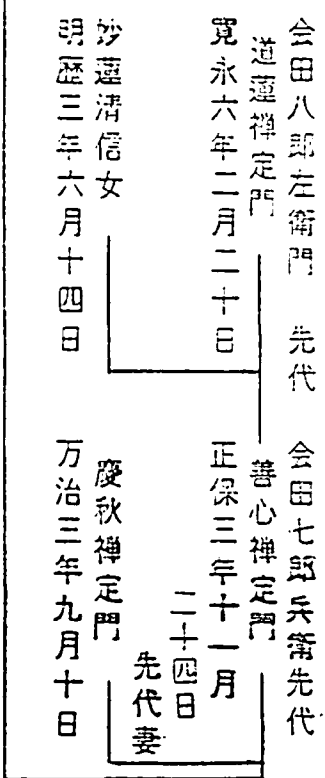
会田家が名主役を命せられたのは、元和元年（一六一五）以前と推定され、阿部備中守正次（元和九年岩槻城主）からも同様御免を許されて居る。同家には元禄時代に改修されたと云はれる。白壁黒塗の長屋門があり、埼玉県指定の文化財になっている。

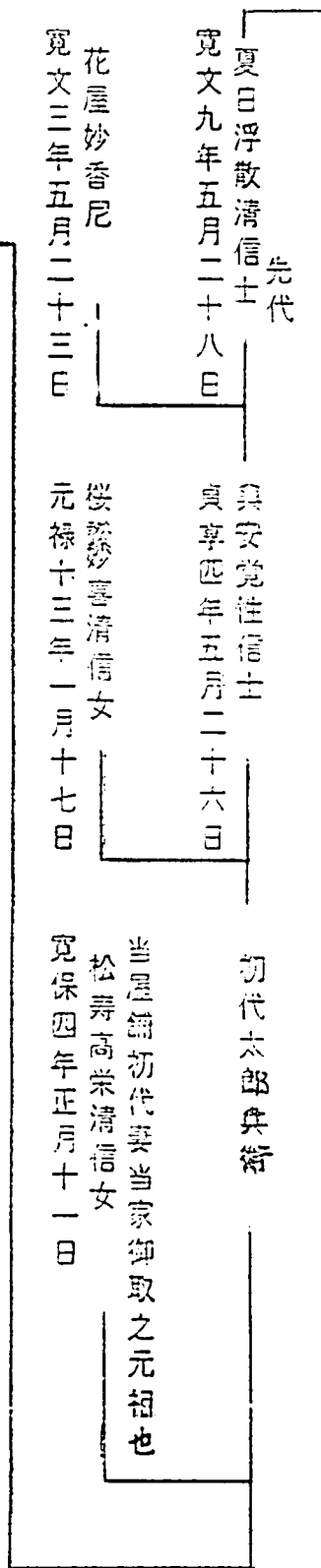
◎四丁野会田太郎兵衛家

会田太郎兵衛家は、現在川口市元郷に住して居る。旧跡は、達売住宅が建ち面影がないが、構廻や屋敷内に墓地等もあり、隣接の附近には、愛宕社・稻荷社・弘誓寺・薬師堂・十王堂等の寺社が取り巻く様に配してあり、道をはさんで向側に越々谷山・迎養院・神宮寺と云う寺があり、中世武將の館跡を思はせる橋の家取跡である。

当家の日持帳を年代を追って系図を作成して見ると、

四丁野会田太郎兵衛家系図





二代傳次郎 太郎兵衛嫡男
徹通圓翁清信士
明和八年正月十八日卒

芳林智盛清信女
享保九年四月二十一日早世

以下三

三可守会三郎 (三十七代) 太郎兵衛十代故

会田義盛氏の妻香子氏談「当家には現存する 芳林智盛清信女 享保九年四月二十一日早世

先祖に関する資料になる様なものは何もあり 同家について迎養院過去帳には、同寺の格

ませんが、私の夫義盛の代で三十七代と云は 上げに怒方した会田太郎兵衛家に対して「永

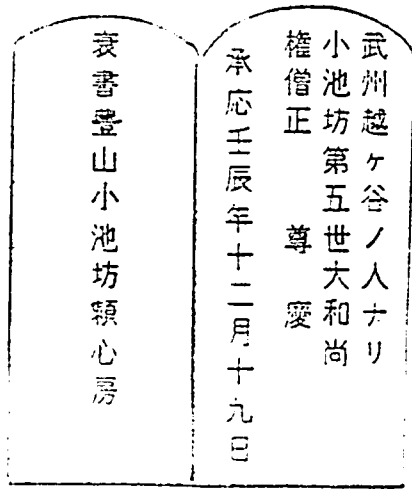
れて居ります。太郎兵衛十代ですが、途中で 代院号を授く」と記してあり、墓地には、寛

絶えてしまひ、再 後太郎兵衛を名乗り十代 永六年二月二十日の墓石の他に、それより古

目になります。当家は、徳川以前には、小田 いもの五基の五輪塔がありますが残念乍ら年

原北条氏に仕へて居た様で会田出羽介と申し 号・改名共に不明である。

尚、会田家日祥帳並に位牌の中には、



があり、未田村金剛院由来記の内に、
 「第五世祖尊慶字は頼心 越ヶ谷御人、姓
 会田氏、父名石見隋尊阿上人当院五世也」
 とあり、此の尊慶は、四町野村会田氏の出
 の人であろう。

此の会田家を後谷会田富右衛門家「系図」
 にある「三郎左衛門正重、兵邦に従う、越谷
 に住す」「正之越ヶ谷に住す」と同系とする
 事は不明であるが何等かの関係が考へられる。

◎井出家

井出氏永昌碑

埼玉出羽色衰井出氏中世祖曰、会田清右門
 以海野幸氏支裔、有故潜井出邑、帰農因為
 氏姓有志局。因立名、某年信州去遷武州、
 主同宗会田出羽為越谷駅吏已而出羽没子某
 幼故 幹家争、巨野其姓迺正及孤長諒其
 藏退占親郷美田宅 以下略

○井出氏系図

第一代 会田清右衛門 越ヶ谷会田出羽ノ
 第海野

○第一代 会田出羽清右衛門ハ越ヶ谷御殿
 田出羽ノ苗裔ニシテ会田出羽ハ清和天皇第
 三皇子四品刑部卿貞元親三七代裔孫海野小
 太郎幸氏ノ末流ナリ、祖先海野事故アリ、
 信州井出村ニ落テ居テ歳ニ伏スルヲ以テ井
 出ヲ称セリ、后子会田出羽氏ヲ襲イ越ヶ谷
 ニ至ル同宿ニ住ス、井出門兵トモ称セリ、
 長スルニ及ンテ取更トナリ勤務スル事年ア
 リ矣、後チ其職ヲ本家会田五郎兵衛ナル者
 ニ譲リ以テ老ス、氏ハ性ハ病弱ニシテ常ニ
 其身ノ保護ニ遠スルノ地ヲ撰シ遂ニ横ノ郷
 (此ノ郷ハ横新田今ハ七左衛門村ナリ)ニ
 移住ス是レ寛永年間ナリ

○会田家本國ハ越ヶ谷町会田五郎兵衛ヨリ家持ニ出ル、会田清右衛門此ノ人ハ越ヶ谷天徳寺ニ石塔有之有候

○第一代会田清衛門

越ヶ谷宿会田出羽孫五郎兵衛ノ次男

嫡子卓世 二男法師ニナル

養子足立郡金右衛門新田井出藤兵衛三男幼名治右衛門

養女村内井出八郎兵衛ノ娘

○第一代会田清衛門ハ、越ヶ谷萩御殿会田出羽ノ苗裔ニ之テ孫会田五郎兵衛ノ子アリ、幼字門平ト称シ同族ニ信屈シテ長スルニ及ビ駅吏ヲ勤ム、延宝年間茲ニ移転ヲナス、宝永年月不詳 病ヲ以テ没年六拾八

○越西会田家の別れとして隣宿会田家・大門会田家は、同一系統なる事は明白であり小田原北条方である。後谷会田家と四町野会田家は同系と思はれ、中村家と共に之又小田原本条氏に仕へ討死する者もあり、共に越ヶ谷に

住す。越西会田家の別れとは明白にいひ難いが、同系として北条家に仕へた一族と思はれ北条方会田系で海野会田と見る理由である。

次に、越ヶ谷会田出羽家・七左衛門会田家・井出家等は、越ヶ谷会田密羽家族で前述の如く信州会田より来る会田氏で上杉方太田氏方であり、岩下会三系であり、中務系系の海野会田系とは別家であるとする理由であり、同姓の会田が二流あるとする理由である。

此の海野会田系と岩下会田系とは、共に、海野氏の支流にて、海野会田は、鎌倉時代より応永七年迄会田郷に居住し会田姓を称した。岩下会田は、応永七年より岩下邑より会田郷の支配をし会田姓を名乗り共に海野である。

そして、時代が違うが共に関東に移住し、海野会田は小田原北条氏に仕えて一族繁栄して各地で所領を持ち、岩下会田は武田晴信に迫はれて信州会田より越ヶ谷に移住し太田三菜斎資正に属し、「越ヶ谷一円を所持」したが

資正追放により越ヶ谷会田側は「盤居」させられ、徳川家康御入国より再び却光を遂ひて越ヶ谷宿の「三役兼帯除地もあり之」と分地も多く一族繁栄して、今日に至って居る。

此の二流が共に越ヶ谷周辺で栄え共に海野であり、共に先祖が会田灣より出るとあるのて、現在では、その色別が困難になつてしまつたのではないのだろうか。

以上の理由で越ヶ谷会田は、小田原北条方会田系と上杉方太田方の会田と二流あるとする理由である。

第二章 越谷会田家資料の疑問点

越谷市市史や「会田家備忘録」「近世村落の成立」等を見ると、越ヶ谷会田家が越ヶ谷の地に落居して、地歩を固める為の新田開発や、同姓の者・同族の者の意識を結集する為名字を拝領したり、賃田による同姓化等で勢力拡大を計った事等、当時のめまぐるしき変遷に生き抜く事の困難な時代の生き方等、よく理解する事が出来る。しかし、越ヶ谷に昔から語り継がれて来た伝承と何となく違質に感じられる。そして、本家筋と思はれる会田様と敬称で呼ばれて居る会田出羽、田町野会田家と越ヶ谷会田家と二軒あると云う事、共に構居を持ち中世の武将の館跡の風格の地に居住して居ると云ふ事、居住地の周辺にある神社仏閣等を周辺に配した中心に住居して居る事等々と、「近世村落の成立」にある会田家に対する解釈では、首肯出来るどころがありません。それでは、「何処か」「何が違

のかと云っても資料的には総て合致して居り、何も間違つて居る様には見えないのであるが、然し、「何処が違う」と云ふ素ぼくなる疑問を打ち消す事が出来ない。

それでは、「何処の部分か」「何の話しの処か」と云う事になる。そこで、次の如く、疑問の点を列举して見て此れを分析し統合して見ると、次の如くなる。

疑問一 越ヶ谷瓜の (市史四・五二頁上)

中町会田五郎兵衛元祖会田出羽義八天正以前
前海野小太郎、信州会田三三郎等六家同道
二而罷越侯大家二而御殿高場二陣屋住居致
今袋町ヨリ左之方出羽屋敷道通也、云云

この中に、

イ会田出羽義八 天正以前

ロ信州会田より無等六家同道二而罷越

1 会田出羽は其実、信濃国会田郷に来たのか
時期は天正以前とあるが、何時なのか

2 六家同道とは、何々家か

3 可故一族引き連れて越ヶ谷という遠い国へ

罷り越したのか

疑問二 イ越ヶ谷瓜の蔓 (市史四・五三頁下)

落居の項 会田七と申

是は海野党落居之節付未候者

口同 (市史四・七二頁下)

元来会田出羽事は海野小太郎子孫に而信州

会田より天正年中、越谷村へ墾居、越谷領

一円に所持致居候処

1 疑問一では、天正以前六家同道と有り、疑

問二では、天正中越谷村に墾居、又落居之項

又海野党落居之節と、前と区と別して書き分

けている事?

2 落居項 会田七家と申すは、と七家あるが

疑問一にある六家同道とは別であるのか?

(八右衛門は名字を変えて会田となる 七左

衛門は当地での分家也)

3 越谷領一円に所持致居候処と「逸」の字が

ついている事は、前々より一円を所持して居

たが、今は全然なくなつたと云う意味なのか

疑問三 会田家譜資料六頁 (市史一・四〇一)

越谷会田出羽家系図

○会田家譜資料

会田中務丞 会田小七郎 小七郎

寺信 幸久

大永享祿之間 弘治初氏康氏

幸盛軍功有 政父子武州の

地を領す

会田中務丞

信清

北条氏より武州領

之内江戸下平川・

葛西小岩云云

当時代官職

会田出羽

資清

父幸久を伴って

武州越谷に住す

山城守

松壽丸

松千代

某

資久

七郎左衛門

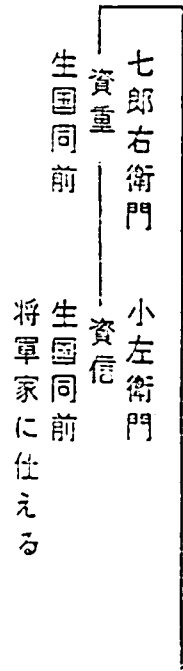
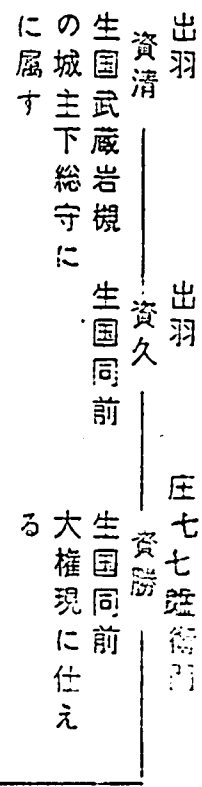
資重

小左衛門

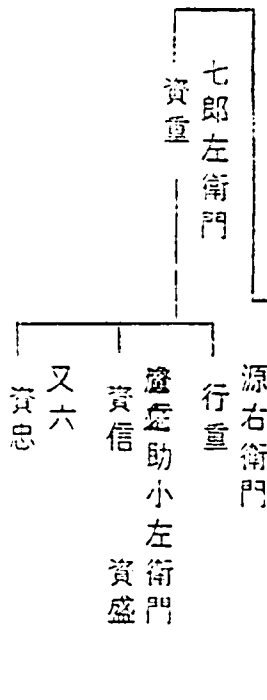
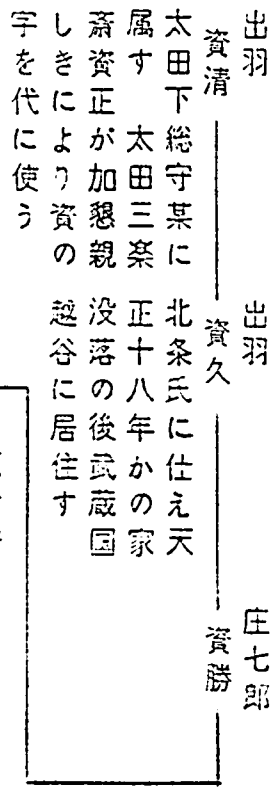
資信

資盛

○寛永諸家譜



○寛政重修諸家譜



会田資清が越谷に居住した理由が、父番監相伴って信州自り武州越ヶ谷に到り而此所に居住すると、これは越ヶ谷瓜の蔓等に書いてあることと一致する。

常々太田美濃守三奈齋資正 会田氏と加懇意而親しき故資の字を授く、依って是れ自り子孫資の字を用ふとあるは、太田三奈齋資正が、天文十五年四月 出越夜戦に北条氏に敗れ、八月二十三日松山城奪還し、十月十九日(別説あり)岩槻城主信濃守資時卒す。

以後太田美濃守資正城主となる。？天文十七年正月十八日岩槻と北条氏康と和儀を成し、氏康兵を退くが、この時、資正の長子氏資(当時六才)と氏康の女(当時三才)と婚約成立す。天文十五年より十九年後の永祿七年正月八日国府台の合戦の大敗により資正の資五郎氏資の嫁として北条氏康の女が嫁入りをする。同七年七月十三日岩槻城より美濃守資正二子政景 江戸太田資高の子康資等追放され

て常陸の佐竹をたより逃れる迄の間の足掛十
九年間の間でないとならぬ。三齋資正は
大の北条ざらいてあるので北条方の被官であ
る。幸久の子資清と資の字を授くる程親しく
なれたらうか？。幸久―資清父子はどうし
ても上杉方でなければならぬ。

疑問四 幸久―資清父子が小田原北条方であ

るとすれば、それ以前の六永五年（一五二五）
渋江三郎小田原方への内通により太田資頼石
戸城に逃れる。岩槻城は小田原方となる。

享祿三（一五三〇）六月小沢原で上杉朝興は
氏綱氏康と対陣、太田資高北条陣中にある時
岩槻城を太田資頼攻めて守将渋江三郎を討取
り岩槻城を奪還する。上杉方の太田氏の城と
なる（岩槻港談）。天文二年（一五三三）太田
美濃守資頼知奈齋道可は、太田資時に家督を
ゆずると伝う。この資時は小田原方である。

（江戸太田資高の弟に資時の名あり、太田美

濃守資正の兄資時となっているが？）いずれ
にしても、この資時の時代、すなわち、天文
二年より天文十五年の間に越谷に来た事にな
るが、資の字のことがあるので一寸うなずけ
ない。

疑問五 越谷瓜の蔓（市史四・七二頁

天正年中越谷村へ蟄居するとあるが資清の
兄が小田原方の家臣として小田原分限帳に載
っている程の人ならば、永祿七年太田氏資が
小田原方の岩槻城主となり、永祿十年八月五
船城外に於て小田原城の支援に赴き、家臣十
三名と共に討死した三幸是れ以後小田原の
北条氏政の城となった。その時代に会田資清
が蟄居する理由がない筈である。蟄居し
たのならば会田資清は上杉方でなければなら
ない筈である。

問六 ◎新編武蔵風土記

卷二百三 埼玉郡越谷領 越谷

出羽堀

坤の方を流れる悪水堀を云 相伝ふ会田出羽介正之当所に住し堀開きしをもてかく唱ふと、会田氏のことは後谷村旧家者富右衛門の条見るべし

(越谷瓜の蔓市史七六頁下) 出羽頭立新規堀当り申候所)

卷二百五 埼玉郡八条領 後谷村 旧家者富右衛門、代々名主を勤む。氏を会田と称す。元越谷に住し、其後当所に移れりと云う。中路系図を見るに 会田三右衛門正重は出羽介正兼が孫源太郎正富の子なり。当国鉢形の城主北条安房守氏邦が麓下に属し、越ヶ谷の地に住す。其子若狭正方は太田十郎氏房に従つて討死す。子若狭正忠二男出羽正之と云う。正之も越谷に住すとあり、今越ヶ谷に会田氏の氏孫なし衰微して江戸に移れりと云。此の富右衛門家は、彼越ヶ谷に住せし会田氏が支族なりしや 系図は所持せざれどもその詳かなることを知らず。

卷二百三 埼玉郡越ヶ谷領 神明下村

政重院

新義真言宗 四町野村迎授院門徒、月向山

と号す。当院は村民七左衛門の先祖 会田七左衛門政重、妻度菩提定尼追福の為に造営す。練札に寛永十九年閏月吉日とあり、按にこの政重と云うは会田系図に三郎左衛門正重と云ものをのす同人にや、きもあら、北条十郎氏房に属せしものなり。慶譽は元和八年六月二十三に死せり、又山号は後妻の法名にて、本尊正観音は政重が守護なりしといひ云へり。

越ヶ谷領 七左衛門村 千観照院 眞 義真言宗 未田村全副院未、日映山と号す 開山尊慶又僧有年、承応三年中興せり、開基は当村を開墾せし会田七左衛門にて、その法名日映観照と云を以て山号寺号とす、本尊弥勒を安ず。

系図中に、初代七左衛門政重寛永十九年(一六四三)十一月十四日卒 日映観照清信士 (注天正八年の生れ)

◎越谷瓜の蔓(市史七五頁下)

寛永初越谷会田出羽表門前へ捨子有之、小袖守袋短刀等相添有之、江戸表由緒之小児と相見へ申候間養育致候処、生長之後才発不尋常、会田七左衛門政重と名付、出羽三男之処、越ヶ谷地沼不等開発致神明下耕地に居住し、弟会田八郎兵衛成者右新田耕地に遺す、是七左衛門村、大間野村 越巻新田等也。

1 出羽地区第一の開発者は会田正之が出羽郷を闢きしによりかく囁ふとありますので正之であり、出羽村出羽郷といふ名称が残り、次に 会田七左衛門政重が「会田出羽願立、新規規筋当り申候所」とある如く第二開発者である出羽三男之处、槐戸耕地沼袋開発致し神明下耕地に住居す、会田出羽の願立により会田七左衛門政重が開発したことになる。

2 政重院の項に「按に政重と云は、会田系図に三郎左衛門正重と云ふものをのす同人にや」とあるが、七左衛門政重は天正七年（一五八〇）生まれであるので別人である。

3 会田七左衛門政重の過去帳に、政重養祖父法室・妙伝 養父母名に道貞禪定門・妙林禪定尼とあるが、この三郎左衛門正重の子孫に出羽正之あり、この正之と関係ありと思えるが、何処の家が今のところ不明である。

四 町野会田太郎兵衛家なる者の過去帳に、三十七代 十代太郎兵衛本太郎六男俗名義盛

五十七才 正徳院悟山義道居士 昭和三十六年九月五日と云う者あり。

過去帳には「初代太郎兵衛の名見えず、松壽高榮清信文安保四年正月十一日当座御取立之祖也」と、町野会田家にはこれ以前に二十代あることになり、義盛氏の妻孝子氏曰く「私共の家は主人で三十七代と申しておりました。先祖は会田出羽介と云、小三原北条氏に代々仕えていたそうですが、途中で絶えて太郎兵衛家となる、古い事を書いたものや物的のものは何もありません。但し、元の町野屋敷には古い五輪塔が沢山ありましたが、今は迎接院の当家の墓にあります。」

迎接院には寛永六年の墓石は見えますが、それ以外のものは五基ありますが年代も戒名も解読不可能でした。何れにしても、正之に關係ある家系と思はれますが不明です。二代太郎兵衛伝次郎は、市史七十三頁下段に会田党之誤荒々々に記置候事の中に、会田伝次郎四

町野村とあり越谷会田一党であります。初代に御取立の祖とあるが不可思議であります。

疑問七 これら一六迄見て来ますと、会田太郎兵衛家の前身は、「小田原北条氏に仕えていた」現在で三十七代目である等々

会田出羽資清の出身地が信州会田より来るとあるにかかわらず、小田原氏の家臣として武州葛西を領した見（一）がいると云う事で、信州会田より来た事にはならないのが不思議に思われます。

疑問八 永正六年（一五〇九）連歌師「宗長」の作とされている「東路の郡登」と云う紀行文の中に、会田弾正定裕なる人物が「下総国葛西庄、市川と馬田川ふたつの中の庄なり」とある所で作者の世話をしている。すると会田家資料十一頁「小田原衆所領役帳」永祿二年

（一五五九）にある会田中務丞なる人物と静岡会田家系図にある中務丞信清とは同一人物であるから、この記録以前に天文二十一年（一五五二）「小田原秘達一 小田原図書館所蔵の中に御馬廻り衆手持百二十騎中に会田中務丞の名が初見することができます。又「小田原衆役帳」永祿二年（一五五九）項に三編城知行役中に江戸衆八十一名中二十二番目に会田中務丞の名あり。

以上考按するに、どうしても小田原方より越谷に住した会田と上杉方として岩塚太田と親しい会田と二家がなければ理解がつかないのであります。

今更に、静岡会田家の系図の中務丞信清以前を四町野会田家か旧家者宮右衛門家の先祖書に付け加えて見ますと、小田原方上杉方と変遷した事、信州会田郷より来るといふ事、永正年中に葛西の地に会田弾正忠裕定が居住していた事、天文二十一年小田原秘達に見え

る事、永録二年小田原赤所領没帳に記されて
いる事等一致するわけである。藤岡会田家と
四町野会田家を入れ替えた事となります。

疑問九 越ヶ谷瓜の蔓（市史四・七五頁上）

会田四郎兵衛菰 菰着 出
羽一同開起之党にして旧家也、分地多其後
退転仕候、会田久衛門は此党なり、東名主
と唱申候代々御檢地名所請來候処六左衛門
代に成養子文之助と申者に而寛政申退転
新町久右衛門家は幕末まで東名主を勤めて
いた家柄ですが、その本家は会田出羽一門
にして同道六家の一つであり久右衛門家は
その初期の分家であります。

新町会田久右衛門家過去帳

玄微

淨空

修西

慶長14.12.14

万治2.3.6

延宝6.10.14

(一六〇九)

(一六五五)

(一六七八)

梅詠

淨意

白貞

延宝四.12.3

享祿13.8.14

享保13.5.25

(一六七五)

(一七二八)

(一七三二)

初代玄微が五十才で卒したとすれば天文十八
年の生れであり、この会田久右衛門家の当主
会田圭（越ヶ谷新町二町目）氏の語によれば
「私の先祖の出は、信濃国四賀村と云う所に
会田という処があり、そこに広田寺という寺
が先祖の墓のある寺である。私の祖父は毎年
秋の彼岸に信濃の善光寺へ詣てその帰りに広
田寺に廻って詣りして来ておりました。と
いう事実があり私も祖父の言い伝えの寺を一
度見ておきたいとの念願から数年前に詣って
来ました。」と
六家同道の内の一家新町会田家が、今以っ
て、先祖の地信州会田の広田寺に詣てている
という事は、瓜の蔓にあるが如く、越ヶ谷会
田家の正固は信州会田であり、葛西の会田氏
の支流でないといふ証明になる。

第三章 越谷会田家と四丁野会田家

第二章の九項目に渉る疑問点を列挙したが此の疑問を総合して見ると、一ヶ所だけを取り替へれば辻妻が会ひ、総てが理解出来るのである。即ち、静岡会田家系図の内、初代資清以前の部分を四町野会田家の先祖不明の部分に繋げる事により四町野会田家に伝はる伝承の「小田原北条家に仕へて居た」「会田出羽介と云った」「現在で三十七代目である」初代太郎兵衛位に「当家鋪御取之祖 太郎兵衛初代妻」「出羽村の内に四町野がある」等々の事柄が繋がって来て理解できるのである。それでは、静岡会田家系図の内、出羽資清以前は何処に繋がれば良いかと云う事になる。「信州会田より来る」「生国信濃」とある如く、信州会田郷を見ると、天文二十二年（一五五三）武田晴信は、原筑摩郡攻略の手始めとして攻め落した城が、会田の城だけで物見砦を合せて六城もあり、当時会田氏は、一方

の城持武將であつた事が解る。系統的に見ても、清和天皇より出でたと云はれる海野氏の支流で、始め岩下邑に住するにより岩下氏を称し、大塔合鞍前より会田郷に入部し、岩下会田氏を称したと云はれる事が記されて居る。尚、同じ会田郷の盆地の内、南半分の谷は、河屋原と申し、当時、大永の頃より太田弥門資忠（太田道灌の孫と云はれる）なる武將が居り、会田と一処に武田晴信に攻められ落城して居る。此の太田資忠との關係はどの如くであつたかは不明であるが、岩槻太田氏との繋りを感じる。

以上、信州会田代を見ると、岩槻城主太田資正と「加懇意親しき而資の字を授く」と云う様に、資正の厚遇を受けた事が無理なく理解出来る。「六家同道にて罷越し候大家にして」「越ヶ谷一円を所持致し居候処」とある如く、越ヶ谷領を所領として入部したものと察せられる。

「近世村落の成立」にある如く「政治的に不安定な空白地帯であった」「戦国大名の保護領域からはみ出した地域と『られる』」「地勢的に政治的に未熟な地域であったが故に逆にいえば、出羽資清が、こうした諸条件を見きわめた上、さしたる抵抗もなく、領主的な存在として越ヶ谷に居を構える事が可能であったらう」と推測して居るが、当時戦国の戦ひは、なに故の戦であったかと云うと国の土地の争奪である。つまり、領国の侵奪に外ならない。その様な時代に、未開の沼沢は別として、収益のある、開発されて居る、越ヶ谷郷が「政治的地勢的に未熟である越ヶ谷に領主的な存在として何の抵抗もなく居を構えた」と云う記述はうなずけない。やはり、岩槻太田からの授領として入部したものとせぬは理解がつかぬのである。

「天正年中落居の節」「天正年中越ヶ谷村へ墾居」とあるは、永禄七年国府台の合戦で

大敗した太田三斎資正が同年七月岩槻城より追放され、以後、上杉方太田三斎資正、政景味方の岩槻衆の苦悩は大変なものであったであろう。特に、永禄十年太田氏資討死してより後は、完全なる小田原北条氏の直接支配下になり、旧資正方の家臣は「墾居」と云う文字で表現される事態が生じたのであろう。そこで、新たに小田原方会田家である四町野会田家とか、後谷会田家とかの名が登場してくる事になる。八条馬場の浜野弥平衛治家・変塚中村右馬之助家・後谷会田富右衛門家・柿の木辺内山弥右衛門等みな此の項、今の住居に住すとある如く、小田原北条氏滅亡後は徳川家康関東に入部となり、今迄北条家の家臣であった四町野会田家・後谷会田家等その勢力が弱まり、今迄「墾居」とせられていた越ヶ谷会田家は復活して徳川家康の取立により、越ヶ谷御殿の造営や宿場役人の代役・旗本会田家の創立等御光を浴びて越ヶ谷宿と共

に繁栄し一族分地も多く記され、越ヶ谷近世の支配的存在となるのである。

では、何故四町野会田家の系図を尋ね会田家が必要としたのであろうか。此の疑問に關しては、一際の伝承がなく「タブー」とされて居たものか不明であるが、唯四町野会田家は、越ヶ谷とその周辺にある会田家とは別格の格式を持つ家で、家紋等も違ひ越ヶ谷会田出羽家旗本会田家とは別家である。昭和十八年四町野を退転した後も今以て「会田様」「太郎兵衛様」とか尊敬の言葉が古老の口から聞かれる。同家の過去帳の中に尊慶なる人物が出て来るが、この尊慶は、迎横院五世位職・末田金剛院七世位職を兼ねる人で「姓は会田越ヶ谷の人なり」とあり、四町野会田家の人と憑はれる。又、迎横院過去帳には「永代院号を授く」とある家柄である。元禄時代に絶家となり「松壽高堂清信文 寛保四年正月十一日 当屋鎌初代妻当宗御取立之祖也」と

太郎兵衛家は新たに創立された形であり、二代太郎兵衛俗名伝次郎は、越ヶ谷会田出羽家会巴党分家の一家として居る。之により四町野会田家は、初代太郎兵衛となり、先祖の系図が不用になって来る。寛政重修諸家譜の編纂に際し先祖の不明なる会田家では、幕府に對して何らかの必要性があったか、又は家格を挙げる為のものかは不明だが、寛政諸家系譜には生国信濃のみであるが、寛政には生国武蔵そして詳細に説明が附されて居るので、此の辺に何らかの事情が隠されてゐるのではないか。越ヶ谷会田家は、旗本会田家の本家筋であり、天嶽寺の同家の墓地には初三代の墓碑もある。(注 旗本会田家でも此の初三代を先祖としている)越ヶ谷会田家では、系図にも院殿居士号を用いているが、此れは、後代の者が追号して、先祖の初三代に院殿居士号を与えたものである。この為、年号の違う初三代三冬の院殿号のある新らしい墓石を

遺立している、この様に 旗本会田家の何等かの事情で先祖を明らかにし、又先祖の格擧げの必要性から、四町野会田家の不要になつた先祖書を利用したのではないか。四町野会田家二代伝次認明和八年（一七七二）正月十八日没は、越ヶ谷会田家の五郎兵衛の子と云はれるので、此の辺の事は自由に出来た事であらう。寛政重修諸家譜の作成時期は、伝次郎没後二十年程である。ともかく、瓜の蔓には会田出羽家は北条家に属したと何処にも尋いてない。越ヶ谷西方旧記と静岡会田家系図。寛政重修諸家譜のみ北条に属すと記している。尚、新編武蔵風土記稿には、南後谷の会田富右衛門家と越ヶ谷に住する会田正之家が記してあり、北条家に属したとしている。此の会田家、越ヶ谷会田出羽家とは別家である事が解る。

第四章 信濃国会田郷

一、海野会田氏と岩下会田氏

1 瓜の蔓にある

中町会田五郎兵衛元祖会田出羽儀は天正以前海野小太郎、信州会田より郎等六家同道而罷毆六家御摩高嶋陣屋住居致

とある会田出羽の出身地会田郷とは、現在の長野県東筑摩郡四賀村宇会田にある。此の会田には広田禅寺と云う寺がある。広田寺の過去帳や縁起書・東筑摩郡誌等を引用して中世の会田郷と会田氏について追究して見る。

この会田郷には、海野会田氏と岩下会田氏との二流ある事が解る。即ち、一流は、鎌倉期以前に会田郷に入部した海野次郎幸持が会田氏を称したとあり、応永七年（一四〇〇）の合戦の際、会田五郎右衛門尉宗清兵衛大夫は小笠原秀に属し、守護方に味方して敗れ、会田郷を失い追はれる。此れにもない、会田郷には、同系の一族の岩下会田氏が入部して

会田を名乗ることになる。海野会田氏は、小笠原長秀に属していた為に、主家長秀守護を追はれ、会田氏も会田郷を失う事になったが後数代小笠原に仕えている。小笠原家の内紛は、所領争いより武力衝争へと発展、伊藤小笠原系の宗康・光康と府中小笠原、持長とは文安三年（一四四六）に添田原に戦い宗康討死す。その子政秀は、光康と共に文明三年（一四七八）桔梗ヶ原に府中小笠原持長の子長時と戦い之を敗走さす。会田治左衛門尉幸清は主家が府中を失うにより、「長時字人その為会田幸清も浪人す」とあるは、文明三年、長時の代の桔梗ヶ原の合戦と思はれる。会田一族、此の時、関東に出て来たものか。

此れ以後、信州には、海野会田氏の名は、出て来ない。会田系図にある文明十年十二月の年記は、関東西の地に地歩する年代か。

2 一方、岩下会田氏は、広田寺過去帳に、文

正元年（一四八六）・文明十一年（一四七九）等
各々の亡靈会田御一門也、とある如く会田郷
を支配して居り、永正六年（一五〇九）広田寺
を勧基したる時、菩提寺として御尊牌を安置
して居る。（注）此の永正六年には、高西の地
に会田弾正忠定祐なる武士が居る）天文元年
（一五三二）府中小笠原長棟が伊那小笠原を統
一して飯田の鈴岡城に次男信定を置く。此の
長棟と子長時の二代にわたり岩下会田氏が仕
へて居る。会田氏の北嶽虚空蔵山城は、天文
二十二年（一五五二）武田勢に攻められ落城し
た。此れと同時に落城した会田盆地内の刈屋
原城には、（注）刈屋原城は会田次郎幸持の弟
五男が移住し代々居城した城）太三道灌の子
孫と云はれる太田弥助資忠が大永三年（一五
二三）城主とな、小笠原長時に仕え、同天
文二十二年会田の城と共に来城して居る。越
ヶ谷会田氏が「信州会田より来る」とあるの
は、此の落城を期に移住して来たものと思は

れる。尚、此の会田氏の一族の内に、此れよ
り年、天文十九年（一五五〇）五月林城主小笠
原長時守中を追はれた後、天文十九年九月に
武田勢村上義清の野石城をすめるが、其の武
田勢の中に岩下会田氏、岩田に下って出陣し
ている者が居る。此の会田一族かは不明だが
後代に武田勢の中に「岩下会田軍役十騎」と
見え、会田郷広田寺中に会田広政公の名が
出て来る。天文十年（一五四二）小笠原貞慶
志城を回復した後、会田氏が上杉に通じた
して、会田を攻落し、中信地方を統一して居
るが、此の時、会田の城主城主忠は自害
して会田氏は滅亡した。と東筑摩郡誌には出
て居る。天六十九年武田に降った会田氏と武
田に亡ぼされた会田氏と同一かは不明だが、
会田小次郎広忠を名乗り、広田寺縁起や城郭
全集等に見えるので同系であり、落城後も会
田郷に居住したものと思はれる。

信府統記には、

恒聚山広田寺・公沢寺の末寺ナリ、今田郷
 会田町ニアリ、当寺に林村広沢寺四代雪江
 和尚ノ開起セン、禪刹ニテ草創ハ永正年中ナ
 リ、元來知見寺と号ス、因ッテ今ニ於テ其
 ノ所ノ小名ヲ知見寺ト嚙フ、会田ノ住、岩
 下豊後ト云ウ人ノ運立ナリ。天文年中ニ昔
 ノ知見寺ヲ今ノ境地ニ移シ、今ノ寺号ニ改ム
 、豊後法名地久院殿天窓城高ト古ヨリノ位
 牌ニアリ

以上を按ずるに、知見寺を建立せしは、永
 正六年(一五〇九)岩下豊後守にして、法名地
 久院殿天窓城高太居士にして、広田寺を建立
 せしは、天文年中に会田小次郎広政公にして
 天文十年小笠原貞慶に亡ぼされた広忠は幼少
 にして自害してはて、此処に会田氏は滅亡せ
 りと

海野会田と岩下会田と二流あり、岩下会田
 は、武田に攻められ落城した岩下会田豊後守
 知見寺開基と、武田に降り軍役を勤め小笠原
 貞慶に攻められ滅亡し、行った会田小次郎広
 忠系の小次郎広政会田寺開基とある事が解る。
 (注 小次郎広忠については函館会田家に後述)

二、鎌倉。南北朝期の海野会田氏

・鎌倉時代地頭として会正氏が見え始め、会
 田氏は伊勢神宮の御厨の名で度々出てくる。
 次に諏訪神社の祭司中に会田氏は重要人物と
 して見える。

・建武新政の時、北条時行の中先代の乱建武
 二年七月拳兵滋野氏一族味方する 会田も同
 族。

・南北朝争乱時代にも前同様の名が見える。

・享徳擾乱 親応元年より貞治二年まで続く

・応安元年(一三六八)五月武蔵の平一揆河越
 にて起る

・明德三年(一三九一)小名清の乱 内野の合

戦

・応永六年(一三九九)十月大塔の合戦始まる

水内郡石渡で合戦、この月大内義弘が室町幕
 府に叛き、足利義満の命により小笠原長秀泉
 州に出陣により、この戦決着つかず終了。小
 笠原長秀の出陣により十二月大内義弘敗死に

て終炮、半年程京都に滞在して応永七年（一四〇〇）七月に信濃に入るにより、北信の地侍勢力結集して四宮河原で対戦した。長秀方八百、反守護方四千騎という大塔古城二ヶ月程あり、竜城隊が死の突撃をして戦は終わった。守護長秀は調停が成立京都へ悄然と立戻る。この合戦の後より全田郷は岩下会田氏が入る。この合戦以前には、海野会田次郎が南朝方として見える。又越谷会田家資料には以後鎌倉に住すと見える。

会田宗清 明德三年八月二十八日
小笠原信濃守長秀に属し

会田太郎右衛門小笠原大膳太夫清宗に属す
長将子長長その子清宗子長朝一貞朝一長抹一貞慶と続く

会田小次郎幸清治衛門尉 文明十年十二月
長朝一族牢人 その為幸清も浪人す

三、大塔合戦と以後の岸下会田氏

大塔合戦に長秀方に属したとあるにより、

海野会田氏は、その所領を失い、会田郷は、必然的に岩下会田氏の領する処となった事が明白である。静岡会田家系図を見ても、海野会田次郎が遠長年代に全田郷に入部して会田次郎を名乗り、大塔合戦に小笠原長秀に属したとあり、此の戦による敗北により、応永七年以後岩下会田となり、海野会田氏は会田郷の所領を失う。以後の会田郷に関する記述は総て岩下会田氏である。

上杉禪秀の乱 応永二十三年（一四一六）小笠原政康（長秀の弟）戦功あり、応永三十年（一四二三）管領足利持氏が叛旗を翻えして各地で戦をはじめ、応永三十二年（一四二五）信濃守護職に復活政康任命される。軍団の長として碓氷峠を越え上野國に出兵する。

永享の乱 永享十年（一四三八）持氏の上杉憲実討伐の事を期に、幕府は持氏征討の軍を起す。

結城合戦 永享十二年（一四四〇）政康の兄

長將戦死の五郎宗康が負傷する結城氏朝が擁して援上げ長持氏の遺児春王丸安王丸兄弟を捕えた。

嘉吉の乱 嘉吉元年（一四四一）將軍義教が赤松氏に暗殺される。幕府の権力急速に落ちる。

嘉吉二年八月九日政康卒す。

文安三年（一四四六）三月長將の子持長は、政康の子宗康光康の相続は不当であり、長基の長子長將、その子持長が相続すべきと訴えた。長基の二子長秀が相続したものをその弟政康に行き、その子宗康と光康に相続されてしまった。これに対して、持長に相続あるべきと時の幕府に訴えた。

長秀が持長に譲与するとの証文がなく、又宗康政康にとの譲状がないが、宗康が領掌すべきと判決があったが、これを不服として武力衝突となり、文安三年（一四四六）信州水内郡添田原に戦っている。宗康の死後守護職な

どの公認が宗康の弟光康系を正統と見なして一貫されていなかった事の証に、この合戦の六年後宝徳四年諏訪神社の頭役状に「大夫守護殿」或は「守護大膳大夫持長」とあって持長の守護が証明している。即ち、幕府の衰退で惣領制の崩壊により所領が細分化される結果、動員力が減少して局地的勢力に転落して行った。深志と伊那とにわかれ対立の結果文安三年（一四四六）添田原の戦、三年後宝徳元年（一四四九）には海野持長の所領として、舟山郷を十余年後の寛政二年（一四六一）には屋代信仲が舟山郷を知行させており、小笠原の勢力の後退を示している。

○岩下氏

海野氏系図によると、海野氏は滋野氏の分弟で、源頼朝に所持したる海野幸氏の孫、二郎幸持が始めて会田を領し、会田氏を称した事が記されている。その後、海野会田氏は、海野岩下氏に替ったが、その期間は、室町時

代初期のことと思われる。それは、永七年の大塔合戦の際会田岩下があり、会田氏の菩提寺である広田寺の開基が岩下豊後守（玄尊）で永正年間（一五〇五〜三二）の開基である等の史料による。

会田の海野氏が始めて文書の上に名を出すのは、嘉暦（一二二六〜二八）の頭役状であるが、そこに海野信濃権守入道が出てくる。彼は、会田御厨とともに小県郡小泉の庄の加皇・御子田・宝賀も領有していた、この当時、海野次郎左衛門入道が領地を持っていたことがわかるが、海野庄内のその他の地を誰が持っていたか解らない。又海野氏でその当時名のあるものもこの二人だけである。よって、此の信濃権守入道が海野の中でどのような地位の人物であったかわからないが、然し信濃権守を称しているのだから海野の中では重要な人物であったと思はれる。

岩下氏とこの信濃権守入道との関係は、一

七〇年のへだたりがある上、中間に資料もないのでわからない。この海野会田氏は後岩下氏と替るが、岩下氏の名が始めて出てくるのは、応永七年（一三〇〇）大塔の合戦が最初である。大塔物語は、海野宮内少輔幸義は、安曇郡七賢中村の舎弟中村弥平四郎・会田岩下、その勢力七百騎と書いている。

その後、御所札之古文書には、享祿四年（一四三三）から文明十七年（一四八五）にかけて岩下入道沙弥重阿・岩下滋満幸・海野岩下増壽丸・海野下野守氏貞の四人の名が出て来る。この内増壽丸と下野守氏貞とは同一人物かと思はれる。又満幸は、応仁元年（一四六七）十二月十四日に村上氏との戦いで、総領家の海野信濃守氏幸と共に小県郡の海野で討死にしている。

御所札の古文書その他の史料にも、岩下氏のことには、会田以外には出て来ないので、小県郡の岩下氏が会田海野氏の後に、此の地に

入ったものである事は、広田寺の縁起その他
の史料により解る。

四、海野会田氏と小笠原家

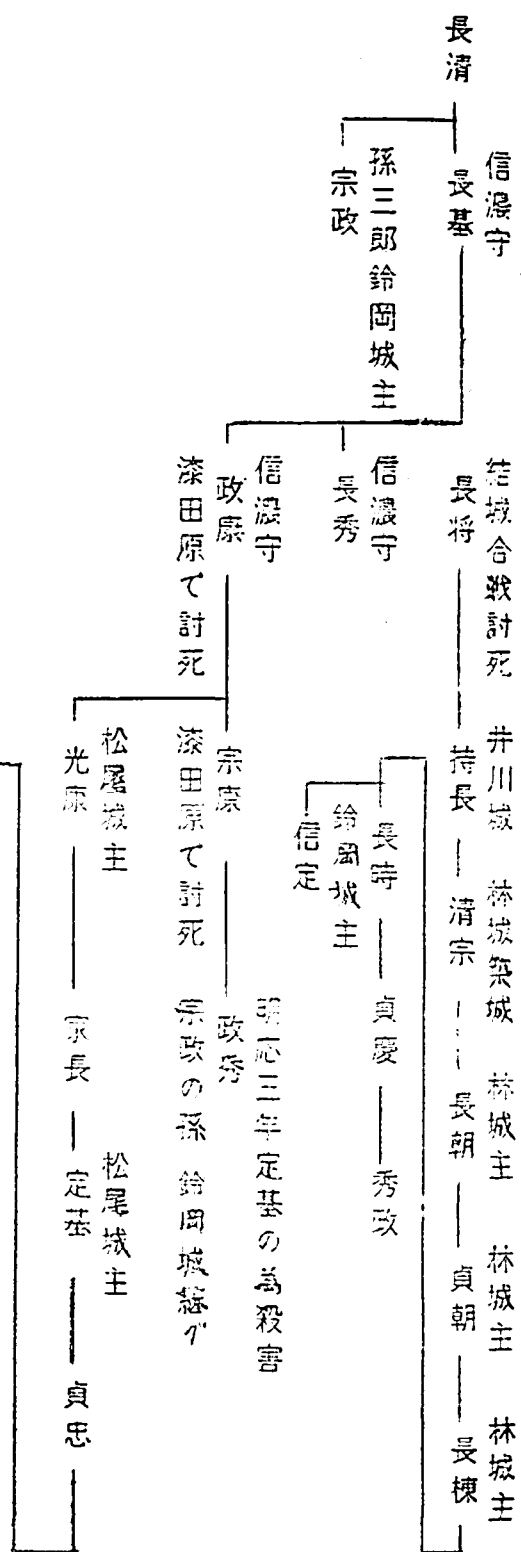
静岡会田家の系図によれば、「会田宗清、
小笠原信濃守長秀に属す」とあり、又「会田
太郎右衛門信守は、大膳大夫清宗に属する」
とある。この点から、会田氏が小笠原氏に仕
えたことが窺われるが、この時代の小笠原家
は、相続問題から一族が拒争っている。そこ
で、小笠原氏の争いについて説明することに
する。

清宗の父持長、その父すなわち清宗が祖
父長将の弟、長秀（大塔合戦敗北によ、）帰京
後、当然自己に相続あるべきところ、長秀の
弟つまりおしの政康にそしてその子宗康に相
続された事から、幕府に訴えた。しかし、そ

の訴えは、取り上げられず不満を生じた持長
は、文安三年（一四四六）伊那の政康宗康父子
と漆田原に合戦し、政康父子は討死した。

この戦で、府中側と伊那側の両小笠原氏に
分かれ、その後幕府は併存を黙認した状態と
なり、両小笠原氏は相反目し合うことになっ
た。幕府の裁定に服さず、武力を行使した持
長の行動は、当然懲罰されるべきを細川持賢
の書状は、宗康死後の「遺跡并守職不変事
被仰付六郎方候其旨可有御存知候」といふば
かりで、持長に対する応報措置については一
言もふれていない。宗康の死後の守護職など
を公認された。光康系を正統と見なした取扱
いが一言していたわけではないことは、漆田
原合戦の六年後の宝徳四年（一四五二）諏訪神
社上社の頭役状に筑摩郡樺庄水内郡漆田の地
頭が「大夫守護殿」或は「守護殿大膳大夫持
長」とあって持長が守護であったことを証明
している。

小笠原家系図



持長の子清宗は、長祿三年（一四五九）新たに林城を築き城主となり、寛正元年（一四六〇）大膳入夫となっている。

○ 大膳入夫となっている。

宗康の弟光康が松屋城主として伊那の小笠原氏を継ぎ、文明三年（一四七一）父政康・兄宗康の弔い合戦を兄の子政秀とともに筑摩の桔梗ヶ原で戦って、中々小笠原長朝を敗走さ

せた。政秀は府中屋形と称したが、筑摩の平定が思う様に行かず、再び長朝に明け渡して伊那の鈴岡城へ戻った。

小笠原民部大輔長朝が一時府中を遣はれた時に「会田小次郎幸清治左衛門尉、文明十年（一四七八）十二月長朝一族軍人、その為幸清も浪人す」とあるは、この時であるかは不

明であるが、静岡会田家には、文明十年十二月となつてゐる。

於田屋城

文明十二年（一四八〇）八月十六日小笠原民部大輔長朝は、仁科氏に心を寄せて居る西牧・山家両氏を攻め、山家孫三郎を討取る。十月十日の大風の吹き荒れる日、西牧氏の於田屋館は火事で焼け、前後の事情から小笠原長朝に攻められた結果と見えるが以後小笠原に属している。（日本城郭全書）

松尾城主定基は、鈴岡城の政秀の領をも手に入れようと図り、明応二年（一四九三）賀の札に松尾城を訪れた。政秀を大手の坂にて殺害した。政秀の妻は、一笠下条氏を頼って彼の地で没した。その財宝をねらつて定基は、再び悪計をめぐらして下条時代を松尾城に呼び寄せ、その途中で討ち取った。この定基の悪業を聞いた小笠原長棟は、下条氏を助け、松尾城に定基貞忠父子を攻めた。そして、ついに父子は、城を開けて逃げ去った。然し、松尾城は貞忠の子信實が継ぎ、その後、武田氏

侵入の時降服して麾下に屈した。とあり以後、森中小笠原の麾下となり、武田侵入まで続き小笠原二家は統一された。

鈴岡城は、後天文三年（一五三四）林城主小笠原長棟の二男民部少輔信定が鈴岡城を継ぎ武田に屈した。天正十年（一五八二）織田信忠に攻められ落城し鈴岡小笠原氏は没落した。

ところで、会田氏は、すでに述べは如く、海軍次郎持幸が会田に住して会田次郎持幸を称したに始まり、応永七年（一四〇〇）大塔の合戦の時小笠原長秀に属し、長秀敗北により会田氏は、同族岩下氏が入部、岩下会田氏を称し、会田氏は、二流となる。静岡会田家系図にある先祖書は、海野会田小次郎持幸系である。

越谷会田家系図

会田中務丞時信一 会三小七郎幸豊大永享
祿之間幸豊軍功あり 一 会田小七郎幸久弘
治初北条氏康氏政父子武州之地を譲焉す
会田中務丞信清北条氏より武州領之内江戸
下平川・葛西小岩・同坂塚・同桑戸、小石
川本領買取る、当時代官職 一 会田出羽資
清生国信濃会田小七郎幸久を伴って武州越
ヶ谷に住す

西方旧記

清和源姓後滋野姓会田氏本氏海野

家紋 丸の内ニツ引六文銭

幕紋 丸の内三本竹丸ニツ巴

会田氏元海野小太郎広道之末流にして代々
信州小県郡海野村住居子孫属小笠原家数代
有戦功至小笠原信濃守長時終為武田信玄矢
利避旧領信州上京從士恋流浪於是会田將監
幸久嫡男会田出羽資清卒人也後三弘治初属
北条氏康氏政領武州之地

先祖 会田出羽資清惣領

母父名不相知 会田出羽資久

歳不相知

天正十八年寅年相州小田原北条為太閤秀吉
滅亡 同八月東照宮御入國し度々越ヶ谷宿
御成之刻資久初奉拝謁 以下略

五、岩下会田と武田の信濃侵攻

永正二年（一五〇三） 林城三に小笠原貞朝成
る。

永正六年（一五〇九） 東路の都登中に、会田
中務丞信清の領した葛西の地に会田弾正忠定
祐と名乗る武士の名が見える。

永正七年（一五一〇） 会田玄蕃豊後守家誠す
（広田寺記） 佐久の大井氏滅ぶ。

天文三年（一五三四） 小笠原棟二男信定鈴岡
城を継ぎ後武田に属す

天文十年（一五四一） 海野家二十八代棟綱、
武田信虎に攻められ関東に走り、幸義は武田
・諏訪・村上の連合体に亡ぼされ、名家滋野
氏の本家と云うべき海野の正統は断えた（真
田氏が復活す）

天文十一年（一五四二） 武田晴信、諏訪頼重
を殺して同郡を手中に入れる。

天文十三年（一五四四） 海野幸降が晴信の旗
下となる。

天文十四年（一五四五） 武田晴信、伊那高遠氏を攻め箕輪城で戦う。此の時甲州軍府中へ乱入する。一小笠原長時配下の者逆心を企てる事により大敗北し府中へ逃れる。一後日此の逆心の者総て亡ぼされる。

天文十七年（一五四八） 塩尻峠の戦、有力なる小笠原長時の配下の者逆心を企てる事により大敗北し府中へ逃れる。一後日此の逆心の者総て亡ぼされる。

天文十八年（一五四九） 佐久の望月伴野氏等武田に降る。

天文十九年（一五五〇） 上田原の戦、上田原にて村上義清と武田勢とが戦い、武田方が大敗した。

同年 七月 深志城林本城落ちる。武田晴信破却を命ず。深志城の楮立を行い、二十三日惣普請を行い、前戦基地とする。長時公に背き晴信公方となる衆は、山辺・洗馬の三村・赤沢深志の坂西・鳥立・西牧等で、長時に従っていた者は、犬甘・刈谷原・赤碓等のわずかの武将である。

同年 九月 武田晴信は深志を落ち、九日に至って再び村上義清の小泉郡の碓石城に対したが大敗した。此の時会田岩下氏も武田に降り出陣している。（七月 林城・深志城落る時降服して居るのか、会田岩下の一部なのか不明である）

同年 十月 深志城代馬場民部の為に犬甘城落ちる。

同年 十二月 上田原の戦そして碓石城攻で敗れた武田勢機に、村上義清は深志奪還を目差す小笠原長時と示し合せて、塔の原に陣す。長時は安曇の氷室に陣して武田に対した。

同年 七月 深志城林本城落ちる。武田晴信破却を命ず。深志城の楮立を行い、二十三日惣普請を行い、前戦基地とする。長時公に背き晴信公方となる衆は、山辺・洗馬の三村・赤沢深志の坂西・鳥立・西牧等で、長時に従っていた者は、犬甘・刈谷原・赤碓等のわずかの武将である。

同年 九月 武田晴信は深志を落ち、九日に至って再び村上義清の小泉郡の碓石城に対したが大敗した。此の時会田岩下氏も武田に降り出陣している。（七月 林城・深志城落る時降服して居るのか、会田岩下の一部なのか不明である）

同年 十月 深志城代馬場民部の為に犬甘城落ちる。

同年 十二月 上田原の戦そして碓石城攻で敗れた武田勢機に、村上義清は深志奪還を目差す小笠原長時と示し合せて、塔の原に陣す。長時は安曇の氷室に陣して武田に対した。

同年 七月 深志城林本城落ちる。武田晴信破却を命ず。深志城の楮立を行い、二十三日惣普請を行い、前戦基地とする。長時公に背き晴信公方となる衆は、山辺・洗馬の三村・赤沢深志の坂西・鳥立・西牧等で、長時に従っていた者は、犬甘・刈谷原・赤碓等のわずかの武将である。

は失敗に終り、晴信は、村上には舍弟典親・穴山・諸角等を向け、大将は深志に駒を向けた。小笠原軍、村上への退却と晴信の一方の大軍に恐れて欠落し、一千騎程で今日は最後の合戦と奪戦武田勢を上野原へ敗走させた。

天文二十年(一五五二) 右の合戦で一応勝を得たが、長時進退極り、二本堂後は居城中塔城に長時を向へてこもる。武田勢再び敗北して甲斐へ兵を納むる。これを期に、長時信濃を遷け京へ逃れる。

静岡系図に、会田小七郎梅監幸久天文年中、小笠原信濃守長時、在千信川林館之館、常武田小笠原雖為一門互争成年尚矣自享禄至天文武田信虎同晴信与小笠原長時數度及合戦長時終為信玄失利千時遷旧領信川而上京、從士悉流浪云云 とあるのは此の時のことである。同年 十月 平瀬城攻略。澤川筋の城を落し緻立す。

天文二十一年(一五五三) 小岩竹城攻略

同年 六月 筑摩郡熊井城を落し緻立す。
同年 七月十二日 小岩城落城、城主古賀盛兼生害させる。

会田。麻績方面掃討

天文二十二年になると武田の鋒は会田・麻績方面へ向けられ、先ずこの方面への侵略は武田一流の機策から始まった事が麻績村法善寺の制札によって解る。

高白斎記

三月二十三日己巳午未刻向 方御出馬

同 二十九日乙亥未刻深志を御立、午刻

荏屋原へ御着陣

同 晦日 城の近辺放火

四月二日戌三 午刻荏屋原城被攻落城主長

門守(太田赤門資忠)生捕、酉刻日之塔原

ノ城自落

同 三日己卯 会田虚空蔵山迄放火、荏屋

原の勢、城ヲ割、酉刻向寅ノ方御緻立

同 六日壬午 御先衆十二頭被為立候昨日

屋代・塩崎方致同心桑原ノ地無最ノ由注進

中略

同 八日甲申 荏屋原ノ城主今福石見守被

候付御使典キウ 中略

同 九日 辰刻葛尾自落ノ申刻注進塩崎出

仕 中略

同 十五日辛卯 巳刻苧屋原御立、青柳へ

御着陣泊ル 中略

同 十六日 高坂出仕

同 十七日 節典既青柳ノ城ノ嶽立

同 十八日甲午 復日室賀出仕

同 二十二日己亥、辰刻御馬苧屋原へ被納

晚ヨリ大雨

同 二十五日 大日方入道御代方へ被參某

陣所へ泊ル

五月朔日酉午 上様深志へ御出恭續ノ儀落

着候由従大岡代方書状候

これによれば、四月二日苧屋原が落ち、太

田資忠生害させられ 四月三日には、会田

氏の本城である会田虚空蔵山まで放火したと

なるから落城もその一両日であつたらう。つ

づいて青柳氏を攻略する為、その背後にある

屋代塩氏を懐柔し、九日には村上氏の根拠夏

尾城を落した。屋代塩崎氏は出仕した。

背後を落され孤立した青柳氏は無血降参し

十五日には、晴信は青柳へ駒を進めて居る。

然し、二十二日には時を越えて八幡筋へと進み、上杉勢五千と対陣した。然し、武田勢此時敗れたのか、一度苧屋原迄退いて居る。

武田勢再び北進し、二十五日恭續青柳の儀談合とあるから、此の日完全に攻略し配下に治められたものである。恭續は服部、青柳大岡は青柳香坂の地盤であり、青柳香坂は武田に在り、服部は武田に従ふ事をいさぎよしとせず上杉氏に従つて去つたかと考えられる。ともかく、会田地方恭續地方も上杉の反撃効を委せず、武田勢の攻略する処となる。

高白齋記

天文二十二年（一五五三）九月小朔乙巳、麻積小四郎方へ來國光ノ刀取遊候 越後衆動ク、八幡破レ、新庄自落（荒砥城）
三日土用 青柳散放火
四日戌ヲ 山宮卜飯宮左京卜苧屋原へ越候
会田ノ虚空蔵山落忌
五日 栗原六井下曾根下桑今徳両角 各深志へ帰城 中略
十三日夜 尾見（荒砥）新戸（荒砥）忍燒

教等七、宣賀方被討捕候 中略
十五日己未 甲刻御注進、教野中二除ノ申
来ル。

十六日窪村左衛門彦名 敵仁科内討捕稱津
治部少輔 吳村少輔討捕ル 中略
為御褒美別源左衛門へ伏此忠節百貫地被下
候 中略二

二十日甲子 前後兼退ノ由己刻甲来ル
下略

此に従は晴信北信に入つて翌ヶ月後の九月一日に上杉勢が去地回復の爲大挙して来攻し、武田勢と更級部布施に就き武田勢を破つた勢に乗じた上杉勢は、八幡筋より動き掛けた屋代氏の本拠の荒砥城を大め統いて青柳城に迫つて放火して居る。晴信は青柳氏の向背を恐れ、城主麻袋小四郎（青柳）を賞し、来国光の笈刀を与えて守らせしたが、その攻勢に敬し難く武田勢は一時河原原まで後退した。会田の虚空蔵山城も落された。五日には、武田方栗原大井大善根下条今福高角等の諸將が皆深志城へ退いて帰城して居る。九月十三日夜

武田勢反撃に出で野襲を掛け麻袋荒砥の両城を焼落し、二十三日には上杉勢を返却せしめた。とあり会田虚空蔵山城返還した上杉勢も又押し返されてしまったと云ふ記録である。

此の高白雲記にある天文二十二年四月三日会田虚空蔵山城放火とある時に岸下会田氏が武田に降り落城したが、原資原部諸九郎貞貞に六廿城が天文十九年九月九日晴信荒砥石城を攻撃し大敗する。此の時、会田岩下も武田に降り出陣したこと書かれて居るが、日本城郭全集の会田諸城は皆、天文二十二年に武田に攻められ落城と記して居る。一度武田に降り（十九年）その後、上杉方に与し、二十二年に完全に落城したか、又は、城の意見が二つに別れ、一部が十九年に降伏し、残りが二十二年に降つたか、不明であるが、後代になり小笠原貞慶に亡ぼされた会田小次郎玄忠が居る。尚武田に降つた会田岩下はその重役に十騎と記され各地で戦つて居ると見られるので降伏

後旧領を安堵されたもの思はれる。

会田古城記によれば、「保元年間より、天正二十年迄、海野小太郎信濃守二男会田小次郎御持也 御知行参千貫文」とある。

ともあれ、越ヶ谷会田出羽家が六家同道にて、天正以前信州より越ヶ谷に落居したと云ふ記は、此の時の落城が理由で武田に降った一族と、降るのをいさぎ良しとせず、新天地を求めて関東迄流れて来た一族があったのではないのでしょうか。

そして、静岡会田系屋の資清の項に

会田出羽資清、父将監相伴自信州到越ヶ谷而居住乎此所 往年因太田資政美濃守 後号三糸斎 常々三糸与会田氏加惣意而親故授資之字 依自是子孫用資之字云云

太田三糸斎資正の岩槻城存城期間は、天正十六年（一五四七）十月以後永祿七年（一五六四）七月岩槻城より追放される迄の十八年間である。故に、此の期間に会田城落城した為、故郷を遠く逃れてはるる関東迄来る最大の理

由と云え、又「資」の字の事も時代的に合致して項突けるのである。

越ヶ谷新町会田久衛門家の当主会田圭氏の話は、郷土史ブームの全然ない時代の話としてあり、おそらく祖父もその先祖よりの話として信州へ行った事と思はれ、会田圭氏も又先祖よりの言伝へとして、その寺に詣でたと云う事である。

第五章 岩下会田氏の滅亡

一、武田家の滅亡

東筑摩郡誌には、この後天正十年（一五八二）・十一年（一五八三）に、小笠原貞慶が府中を回復し、東筑摩・南安曇郡を一気に統一して居る様が記されて居りますが、この中で会田に關係ある處のみを記し、越谷に關係ありそうな要点を述べて今後の研究の資料ともなれはと存する次第です。

天正初期の信濃の情勢は、まず元龜三年（一五七二）十二月二十二日の三方ヶ原の合戦にて始まる。晴信深志を籠し一挙に上谷をとけようと争った。

晴信は、徳川織田連合軍を三方ヶ原に撃破三河まで侵略し、翌天正元年（一五七三）二月中旬には家康の居城野田城を落したが、この戦中に晴信病んでその帰途途中に四月二十二日伊那郡駒場で御大将の晴信倒れる。

天正三年（一五七五）二月二十六日小笠原貞

慶に對しては、織田信長より信濃回復を促す書状が発せられた。即ち、來秋には、信長自ら信濃表に向つて出陣する。そうしたならば小笠原貞慶の還捕は当然の事である。今こそ決意を固める時である。

さらに、天正五年（一五七七）極月二十二日北条氏政に敵對して居る佐竹義重の党の梶原政景から援軍の御発向を要請して来て居り、又同国の水谷勝俊・太田資正からも援軍を求めて居る。然し、貞慶に天正五年の段階にそれだけの軍事力があつたのだろうか。

貞慶の名の見える文書を見ると天正八年（一五八〇）三月二十三日紫田勝家の書状に「其圍御滞留」とか、天正九年（一五八一）十月十五日信長越後へ出陣の時の書状に「猶貞慶可申候也」とか、「委曲、小笠原右近大夫可有伝達候」とか、戦場で武器を取つての括弧ではなく、「器量」のすぐれた小笠原貞慶であるから、信長に屈して各地を巡つて「才智」

を生かしての策略とか諸國の情勢の洞察や先聲の行動を學び府中深志の回復の機会をうかがって居たものであらう。

○信長の武田攻略

織田信長の甲斐信濃討略は、天正十年（一五八二）二月一日木曾義昌の信長出陣の要請に始まる。この日突然安土在城の信長のもとに書状がとどけられた。これにより、織田信忠以下の武將に武田進討軍出発の命令が下された。木曾謀叛の報は武田にも伝はり二月二日には、甲府の新府城から一万五千の兵を率いて諏訪上原城に陣を構えると共に諸々の口を固めて信長の侵入に備えた。

三日には、信長は甲斐信濃への出陣を諸將に命じた。駿河に徳川家康、關東に小田原北条氏政、飛騨に金森五郎が相応して進撃を開始、信忠ら安土勢は、木曾口・岩村口の二軍に分かれ駒を進め、六日には伊豆を発った河尻与兵衛が戦列に加わり、甲斐信濃の武田領

は完全に包囲され、信濃の動搖もまた激しく存地武將の動きも活発となる。

木曾義昌が織田に内通したので勝頼は兵を向け木曾口を固めさせたところ、二月十六日に至り古殿・西牧氏木曾義昌に内通して、深志に對した。岩岡佐渡織部父子も深志を離反して中塔城にこもった。上野原や黒沢馬場てせり合があった。十九日には、岩波平左衛門（二木）も甲州方を離れ吉原・西牧らと相はかり深志を攻め下神林で戦ひ武田方を追討する。

伊那の小笠原信濃織田方に走り、武田は二月二十日上杉景勝に援軍を求めたので、三月五日上杉景勝武田に援軍のため水内郡長沼に出陣したが、二月二十八三甲斐に於て穴山信君が謀叛したので、勝頼は諏訪上原城より引払い新府の館に人数を集めた。このため深志城主馬場美濃守降参する。

三月二日仁科五郎盛信の高遠城落城、三月十一日甲斐の新府の館に火を掛けられて天目

山に逃れたが、ついに武田勝頼は自殺した。

武田氏の統治が終ると、支曇・荒澤の二部は織田信長から恩賞として木曾義昌に与へられた。信長は、尚黄金千両を贈ると共に本領を安堵し帰りざわには寺の縁まで見送る程のもてなしをしたという。三月二十九日には、武田旧領の知行割を二返訪の法善寺の陣に於て行った。

二、本能寺の変

天正十年（一五八二）六月二日本能寺の変によつて織田信長がたはれると、その上記の確立していない信濃は再び無主動乱の巻と化した。内に於ては旧族がその旧領の回復も計り外からは南より徳川家康が、東からは北条氏政が、北からは上杉景勝が侵入の手を伸して来たのである。先六月十二日には、小笠原貞慶が徳川家康の援を得て信濃府中に遷住のた

めに後序兵に忠告を促している。そして、この要機にやがて深志を回復するのである。しかし、貞慶以上に上杉景勝は信濃に動きかけ十三日には、更級郡の清水三河守に忠信する事を求め「關甲信の諸侍共送日一茶候」と上杉に屈する者多くなつて居り、十六日から十八日に掛けて主として北信の配下の武将に旧領を安堵している。と共に新たに宛行っている。上杉景勝は、又川中島より麻績・青柳・会田を降して府中に入り、深志城に木曾義昌を破り、当時上杉氏を頼っていた小笠原長時の弟貞種を城主に迎えて小笠原氏の旧臣の多い安筑のおさとしとしたのである。ところが、七月十六日に三河、かねてより旧領の回復をねらつて居た長時の子貞慶が安筑の旧臣を率いて深志城を攻めた爲、貞種は正統である貞慶に城を明け渡した後に退き、再び小笠原家が安筑を支配する事になるのである。

三、小笠原の府中回復後

深志城回復後の情勢は、天正十年（一五八二）八月十八日木曾義昌は小笠原貞慶が深志城に入った事を聞き、直ちに深志城を攻めたが貞慶も討って出て木曾を敗走させた。そして更に木曾領本山から福島口まで追撃したが、日が暮れたので篝火をたいて帰城の途中本山に於て木曾の隠兵の急襲を受け小笠原弥次郎・大甘治右衛門等重臣を失っている。

九月二十日には、徳川家康は小笠原貞慶が深志城に入って居るのに木曾義昌に安筑二郎を安堵して居る。こゝは、徳川家康が木曾氏を味方にする為の策略の意味も考へられるが小笠原貞慶を無視したとしか考へられない事である。小笠原貞慶が徳川家康の配下に入り君臣関係が結ばれたのは、子の幸松丸（後秀政）を入盾として三河の家康の元に送った天正十一年（一五八三）十一月二日以降の事と考へられる。

反小笠原勢力の駆逐

小笠原長時が天文十九年（一五五〇）春から深志城攻防戦に破れた最大の原因は、小笠原譜代の離反であった。この事情を認識して居る貞慶は、家臣団の育成とその支配に異常な迄の熱意を示した。

四、会田の討伐

本能寺の変以後、松本以北は上杉氏が侵入し、事如くその勢力下に置かれていた。会田氏も「一年の十一月会田の城の者ども越後へ内通仕、川中島より合力を乞、やきうの入に小屋を立居申候」と柳生（矢久）に砦を新設して小笠原氏に対抗していたが、小笠原貞慶は天正二十年（一五九二）十一月三日から、会田を攻め、日を経ずしてこれを落した。

この合戦に加わった者は、大甘左衛門（久知）を総大将として、大甘衆二十騎、御旗本

衆三十旗、仁科衆十騎、塩尻衆五・六騎、計六十五・六騎であったが奮戦し、小県郡からの援軍多数と城將堀ノ内与三衛門（越前守）を討取り落城させた。

またこの時、深志城にいた小笠原貞慶から犬甘半左衛門に与えた書状によれば鉄砲が相当数使用された事が知られる。「鉄砲の儀、明日急度指し越すべく候」とか、或は「玉薬あはせ次第、先づ先づ二百枚指し越し候、出来候は追々指し越すべく候」と三日から六日まで日を追って玉薬を送っている様子が記されている。

ここにいう会田氏とは、鎌倉時代から会田御厨の地頭として入居していた海野氏の一派である小県郡の岩下氏で、武田晴信進攻の際は塔ノ原氏らと小笠原をそむいてこれに降り武田氏の治政中は、その軍役十騎を勤めたが武田氏の滅亡後いち早く貞慶から報復の処置をされた解である。

この時、当主小次郎幼少の爲堀ノ内越前守らが、旧来の会田城の地から数キロメートル小県郡寄りの矢久の新塞を築き、これを決戦場としたもので、この山城は後世「一期の城」として伝へられたが、江戸時代の俗書にある「覆盆すの城」はその言葉の転化である。城主小次郎は小県郡青木に説がれて、五輪の尾根で自殺したと伝えられているが、会田氏の菩提寺広田寺の地域にこの時の戦死者一同を葬った会田塚が遺って居る。（広田寺縁起）会田氏は、ここに全く亡び、この地方は小笠原氏の領有に帰した。

貞慶の「違背之士悉殺之」といった武断的な面を裏付ける事に四賀村は勿論の事、東筑摩郡に現存一戸も会田姓を名乗る家がない事でも解る。

五、函館会田家

信濃国筑摩郡会田古城記によれば、「会田の里は保元年中より天文二十年まで海野小太郎信濃守二男会田小太郎御持也。知行三千貫文」と云はれ、海野会田氏は古くは、会田御厨として発展し、鎌倉幕府の成立に際して領国に変入され信濃府中に近い処から信濃全体の動きに關係する処が多く、又幕府の家人として「鎌倉に住す」とあるが如く重要視され吾妻鏡にも度々その名が出て来る。その後諏訪神社の祭頭役として活役した事も見える。大塔合戦には、海野会田氏は、信濃守護職に任じた小笠原長秀に属して敗れ会田郷を失う。次に会田郷を支配するのが同族海野系岩下玄蕃なる者が見える。会田に住し岩下会田氏を称す。此の岩下会田氏は、小笠原長時に仕へる。主家小笠原家は武田に利を失ひ長時京都に逃れる後も岩下会田氏は武田に抗して落城天文二十二年会田堡後守亡びる。武田に

降り軍役を課せられる会田小次郎広政、再び会田郷広田寺を開善したが、天正十年小笠原貞深深志城回復後、会田は上杉に通じたとの理由にて攻められ滅亡した。此の様に

此の様に中世を生き抜いて来た会田家も此処に完全に亡び去ったのである。大正七年刊行の「東筑摩郡家名一覽」を見るに、中世近世と継続した郡下各村の古い家が間接的に伝はる氏族の分布を見る事が出来る。その中、海野氏より別れた会田次郎・塔原三郎・田沢四郎・荊屋原五郎・光之六郎と東筑摩郡に進出して入部した五家は、調査時一二五〇種姓の内五〇戸以上あるもの一〇〇種姓あるが、その中に一家もない。会田姓如きは、一家もない様に亡はされた事となり、わずかに会田の地名と会田家の伝承が残るのみで此の地上より亡びざったかに見える。わずかに小岩井（会田の支流か）金井（会田氏所領中の字名）がそれらしき氏姓として残るのみである。

此の如く、小笠原貞慶は、徹底的に「違背の士は悉く殺す」戦法を取った様である。「会田之儀、色々被申事共候、卜角其元無氣遺萬々仁置木、被申付専一候」「日岐事候、雖然押詰、些之度入念、今朝も両度申遺候、定而落居不可程候」会田氏に付いては、色々言つて居るが、氣遣なく萬々仕置する様に申付の通り専一にする様々にと。日岐氏については「落居などある可からず」と降参を許さないと厳しい態度でのぞんでいる。「此項、違背之士悉く殺之、丹波守亦賜死」といった小笠原貞慶の武断的な面が見え、冷酷非情なる事を断行して居る。会田氏は、武田追攻の際は、塔原氏らと小笠原を背いて之に降り、武田氏の治政中はその軍役を勤めたが、武田氏の滅亡後、いち早く貞慶から報復の処置をなされたわけである。

此の如く、会田氏は滅亡したはずであるが今処に「私の先祖は何処か」と言つて居る会

田氏がある。先祖元越ヶ谷に住し阿部候に仕へ七十石次に伊奈家に仕へ百石伊奈流檢地人として津堅候に仕へ弘前の地へ算者の家柄として又大砲奉行として名を成し、現在函館市に住する函館会田家がある。

此の会田家の系図の中には、先祖の出所は書いてないが、初二代の名前と年代に見るべきものがある、即ち、

○函館会田家系図

初代

広正

勘解由

天正己未ノ人ナリ 治左衛門

二代

広忠

三代

広英

与左衛門郡氏伊奈家ニ仕へ百石（延宝年中没）

四代

広親

伊兵衛津釜ノ地へ慶安中之生ニシテ伊奈

流檢地人、津堅藩ニ仕へ御馬廻組御馬役、享保九年(一七二四)四月十二日没、法名密參道附、弘前司懸岳院ニ葬ル

五代

慶貞

伊兵衛龍名元禄十四年五月柏木組代官相勤メ其后郡奉行手云役成る、世禄百石外役、料懐子百俵給セラレル、延享三年没、法名月寒院通定居士、勝岳院ニ葬ル

六代

広明 広運トモ云

幼名宇門 伊兵衛 御馬廻井上外記流砲術師範役天明四年没法名出照院、志貞鑑居士、備考墓八御門第一同守道トアル。「私備考」但シ六代目ノ記録ヨリ抜粹、「初越谷ニ居、阿部候ニ仕エ、七十石、其ノ后与左衛門家相統伊奈家下代百石、然ル処延宝八年津堅候ニ召ララル算者役、金六兩西人扶持、又此項檢地ニクワシイ財津久衛門、田口兵衛、全三伊兵衛比留間召抱エラレルトアル

弘前藩日記
天和二年越後高田藩没収ノ際幕府令ニヨリ津堅候檢地仰付ラル、其ノ時檢地人ト

シテ参加続イテ貞享檢地ニ参加、勞大ナルニヨリ、百石下置御馬廻仰付ラル

七代

広訓

伊兵衛 御馬廻砲術師範家寛政八年藩校ケイ古役ノ師範役被仰付、文化五年幕府ニヨリ三馬屋外砲台築造節大砲奉行被仰付備付担当一貫目ヨリ二貫目五二十、筑造松前ニモ送ル

當時師範家、砲術井上流令三伊兵衛長谷川家森郷右衛門、長矩反水流佐々木専右衛門安盛流千葉家岸和田流阿部家、和術本覚古巳流唐牛甚左衛門天保二年没、法名道考院善覺了鏡居士

通称

勇吉 熊吉

九代目広行名乗ル

伊兵衛弟、砲術家天保九年没、法名太寿院筑山道勇居士

八代

広業

宇野吉伊兵衛、安政三年没、法名泰心院智翁良久居士、嗣子ナシ

九代

広行

熊吉勇言ノ子 家ヲ開ク 文正三年生
御馬廻陣術師範家 百五十石 宗法井上流
ナリシカ嘉永二年藩名ニ依リ高島流幕府師
範家旗本下曾根甲斐守金三郎信敦衛入門、
嘉永四年青森砲台築造奉行明治戊辰役小對
長、野返地出兵、明治三年没 法名不 院
広行精砲居士

峰吉

熊吉弟 会田

慎三

野呂ノ養子熊吉ノ弟

栄之進

唐牛家へ養子

慶五郎

黒竜家へ養子

十代

広教

宇門嗣子ナシ 熊吉子

きた

宇門姉 柳田当言司則領へ嫁ス 御蔵奉行

広勝

周言子ナシ 宇門弟

十一代

武平

きた二男会田家相統 俗名亮覺北海道広持
持寺住職

芳夫

武平の兄輝田大蔵省属官其子千葉榮神戸
住

右弟会田末太郎 始メ会田家相統人ナリシ
カ日清戦没、有須川宮島台海ニテ病死其後
二男会田家へ(武平)

十二代

金吾

会社員 大洋漁業系会社勤ム課長

十三代

宏記

金吾長男 千葉工大電気工学二年在学中

記録

会田家ノ伝ニ曰

先祖伊兵衛広親ハ御旗本伊右衛門嫡孫ノ由
浪人ニテ暫越ヶ谷ニ居住シ、其ノ后江戸ニ
罷有由、兼テ算術嗜ニ付、此砌被召出ルト
也、右御用済、御国元ニテ御約東ノ内半知
百石被下置 御馬廻被仰付、其子伊兵衛郡
奉行相勤メ其子伊兵衛當時御馬廻 明和二
年津軽藩士 今兵部右衛門奥富士

遺譚

会田伊兵衛広明者井上外記流砲術、正統己
来之人也長谷川茂兵衛経利伝授、為師家、
御馬廻相勤。

武州越谷ニ居阿部志歴候ニ仕、七十石之処
其后御暇申受、伊奈半十郎様へ帰参 父与
左衛門家相続百石ニ而下代相勤メ然処延宝
八年四月御家へ召出、金六両四人扶持被下
御馬廻ニ成享保九年四月十三日病死

其子伊兵衛広貞(五代)郡奉行手伝相勤、
其子則伊兵衛広明(六代)也

此の会田家の初代「広正 天正己未ノ人ナ

リ」「二代 広忠治右衛門(以下不詳)」と

ある此の二人については系図にはあるが良く

解らない。

「三代 広英 郡代伊奈家ニ仕へ百名延宝

年中没」「四代 広親以前は越谷に住し」と

あるので、三代広英はすでに越谷に住した事
が解る。二代広忠は、天正十年仮に二才とす
ると、又広忠三十才の時の子とすれば、慶長
十五年(六一〇)生れとなり、広忠延宝元年(一
六七三)には六十三才となる。又会田七在

衛門政重の没年寛永十九年には六十二才で広
忠と同年生れと云ふ事になる。三代広英は、
此の年三十三才で「伊奈家に仕へ百石」とあ
る。会田七左衛門政重は「元和年中会田氏、
政重会任官伊奈氏」とあり、共に同時代伊奈
家に仕へて居る事になる。

此処で岩下会田氏の滅亡の最後を見ると、

「信濃会田郷「一期の城」としての矢久の砦
が小笠原貞慶に攻められ落城城將遅ノ内三左
衛門越前守討取られる。城主小次郎広忠は小
県郡青木に脱れて、五輪の尾根の山小屋にて
自害してはたと伝へられている。会田氏の

菩提寺広田寺は此の戦で城も寺も焼かれて亡んだ。寺の住職四世利天等俊和尚は（文禄三年没）、関基の位牌と過去帳を抱いて山中に難を避け、翌年寺の西北に此の寺の戦死者一同の遺品を収め葬り会田氏一類の亡霊を弔った。会田家が今も残って居る。

此の記事の中で「会田小次郎幼少の為城将姫ノ内越前守」「小次郎広忠小黒郡青木に脱れて五輪の尾根の山小屋にて自害して果たと伝へられて居る。」此の点を見るに、代人を仕立てて死んだと見せ掛けて逃れたと見る事も出来る。「伝へられている」と云う事は不確定要素が含まれている。会田家は翌年戦火が納ってから「遺品を収めて葬る。」とあり死体を葬ったのとは違うので此の点に疑問が残る。小笠原貞慶の書状に天正十一年二月十四日付「城主の子息平三を逃したので必ず尋ね出して処置せよとの強い決意が示され十六日付の書状には安曇郷にて之を討ち取り、小

谷へは細管河内守を派遣して沢渡九八郎を捕えた。」等と書状も見え、会田の追求も同様と思はれ残党一人も残さず討取られた事が解る。幼少の小次郎を自害した事に見せかけて此の事を「伝へられている。」即ち、流言して伝はって追求を逃れたとも考えられるのである。

函館会田家の系図の中に、「旗本会田伊右衛門藩孫ノ由」とある。旗本会田伊右衛門家も先祖会田出羽資清生國信濃会田郷とあり、此の会田小次郎広忠の祖父に当る年代で附合して居る。天文二十二年より天正十年迄（一五五三〜一五八二）二十九年の間には、先祖の一部が関東で榮えて居る事がも知れ之を頼って脱れたとも考えられる。反対に会田郷には、追求を逃れる為に自害して果て一族亡ぶと伝ひ、遺品を収めて会田家を築き弔ったものとも言える。ともあれ、函館会田家の家系にある記録に付いては、越ヶ谷会田家の中に

は見当たらず「伊奈家に仕へる」とある如く
何等かの援助で伊奈家に仕へる事が出来たか。
此の辺の事情は明確に出来ないが、今後の研
究課題として何等かの手掛りになる事と信ず
る。

一、広田寺縁起

会田小次郎殿居館址 及 御塚

会田村会田町の北、内津川の東にして長安寺・広田寺に及ぶ南に緩かに傾斜せる一帯の地を会田村大字会田宇殿村と云ふ。殿村には虚空蔵山城主会田小次郎殿の居館ありし所にして殿村の名亦亦居館ありしに起因するものと云ふ。殿村の内にて会田小学校の北裏、三ヶ村組合隔離病舎のある畑地は多大の人力を費して地均ししたる土地にして東西四十三間、南北五十間の扇形して千三百十二坪あり会田氏の居館ありし所と云ふ。

信濃国筑摩郡会田古城記中に左の一節あり
「会田の里は保元年中より天文二十(一五五)

一)まで海野小太郎信濃守二男会田小次郎御持也。御知行三千貫文。小次郎広政公御本城

(居館のこと)より吾町拾間下に城下町(会

田町のこと)あり。御本城より丑寅の方一里四町拾八間、虚空蔵山古城地本城平(東西二町、南北十九間)石垣二段あり。」と以て吾親址たるを証すべし。

居館址に立てば虚空蔵山城を望見することを得べし。

尚古城記中に「広政公御領地は小岩井・河瀬・金井・京山・横川・沼田・長越・藤池・取出・穴沢・会田町(本町・新町)の十一ヶ村」なることを記せり。

殿村の内にて会田小学校運動場東南隅、安寺大門西側に鎮座せし右座宮八幡は会田氏の守護大武神なりしが明治四十三年宮本神明宮へ合祀せらる。

会田小次郎御塚と云ふるは広田寺総門前、御徑橋の北、眼下を流るる内津川の辺り、永井原の南部にしたら桜一幹立てる四十坪ばかり

りの芝原あり。昔はここに抱へもありたる松の大木ありしか大正三年項の大嵐に吹きたはされ他に一抱へ半もありしハクジは三十年前に老木とはりて枯損したりと云う。桜樹の下に自然石の石仏一基立てり僅かに梵字キヤカラパー（空風火水地を刻せる塔婆の意）を刻せるを認む。何代目の小次郎なるや明かならずと雖も「会田小次郎の古蹟の花は幾代散らない糸桜」と唱はれて人口にカイ炙せり。

二、会田寺過去帳

知見寺（東京厚郡会田村）

今より四百二十年前文龜永正の頃玄圃和尚会田の里に巡り来て錫をとどめ一字の草庵を結び朝夕読経し、誦道念仏を唱へて衆生に回向し専ら禪し居りし故郷士会田殿の御母依する所となり、ここに於て小岩井の三より八可

余門隔りたる所（今の会田村知見寺屋敷）に堂宇を造立し福寿山知見寺と号し、永正六年開山式を挙行し、会田殿の御菩提所と定められ。かくて御開基会田殿の御尊牌を安置し御代々の靈位をもおさめ給ふ。

（文正元年 一運妙香大師

（文明十一年 妙全禪尼

（全用宗越

（華月道香

（長享二年 三宗永玄居士

（同 妙珍

（文龜三年 宗心

（同 的岩久端

（永正 心月宗無

（永正 無相永榮

（永正 桂月全香

各々上五会田第一門也

御開基 地久院殿天窓浄光大居士

永正六年新亡時方

玄圃二三

御開山 雪江玄固六和尚

永正辛未年九月二十三日

寂滅せられる。

広田寺位牌に

永正八辛未年九月二十三日

前惣持当寺開山雪江玄固大和尚 禪師

良雄代改之

とあり、良雄は広田寺第十四代逸叡良雄にして安永十辛丑年正月二十九日寂滅す。

信府統記によれば

福聚山広田寺

広沢寺の末寺なり。会田与会田町にあり、当寺は林村幸沢寺四代雪江和尚の開起せし禅刹にて草創は永正年中なり。元来知見院と号す。因って今に於て其の所の小名を知見寺と唱ふ。会田の住岩下壘後と云ふ人の建立なり天文年中に昔の知見寺を今の境地に移し今の

寺号に改む。壘後法名 地久院殿天窓城高と古よりの位牌にあり。

三、広田寺伝来海野真田系図

人王五十六代

清 和 天 皇

貞寛親王号滋野天王

二代 幸恒 海野小太郎信濃守

三代 幸明 海野小太郎信濃守

真家 称津小次郎

重俊 望月三郎

四代 幸真 海野小太郎信濃守

五代 幸盛 海野小太郎信濃守

六代 幸家 海野小太郎信濃守

七代 幸勝 海野小太郎信濃守

八代 幸親 海野小太郎信濃守

九代 幸広 海野小太郎信濃守

壽二年備中水島合戦之時奉之大將軍給
討死 家之紋スワマ世代ヨリ六運鏡

十代 幸氏 海野小太郎信濃守

十一代 幸繼 海野小太郎信濃守

十二代 幸春 海野小太郎信濃守

会田小次郎

塔原三郎

田沢四郎

借屋原五郎

光之六郎

十三代 幸重 海野小太郎信濃守

十四代 幸広 海野小太郎信濃守

十五代 幸遠 海野小太郎信濃守

十六代 幸永 海野小太郎信濃守

十七代 幸昌 海野小太郎信濃守

十八代 幸信 海野小太郎信濃守

十九代 幸定 海野小太郎信濃守

二十代 幸秀 海野小太郎信濃守

二十一代 幸守 海野小太郎信濃守

二十二代 幸則 海野小太郎信濃守

二十三代 幸義 海野小太郎信濃守

岩下豊後守

二十四代 幸数 海野小太郎信濃守

二十五代 持幸 海野小太郎信濃守

二十六代 氏幸 海野小太郎信濃守

二十七代 幸諫 海野小太郎信濃守

二十八代 棟繼綱 海野小太郎信濃守

二十九代 幸義 海野小太郎信濃守

左京大夫於信州村上義清合戦之時
討死

三十代 幸隆 海野小太郎信濃守

彈正忠法名一德系此ノ代ヨリ真田之
庄居住而左名乗ルナリ 永祿八年
乙巳五月十九日死ス
注 武田晴信に招れて旧領真田に帰る

天照大神宮

枝葉繁茂之所

春日大明神

三十一代 信綱 真田源六左衛門

天正二年五月二十一日於三河長篠
信長ト勝頼ト合戦之時三十九才而
討死法名太室道也

一、海野村白取神社縁起書

三十二代 昌幸 真田安房守

慶長十四年於高野六十五而死ス
法名一翁二聖

信州海野白取大明神 張紙ニ曰ク

滋野姓祖ヲ祀リ奉ル

三十三代 信幸 真田伊三守

文祿二年右月朔日從秀吉公被仰付
仕諸大夫法名徹岩一当万治年戌戌
ノ曆十月十七日死ス壽九十六

謚号滋野天皇

貞秀親三ヲ奉ル

家紋 洲浜

三十四代 信政 真田内記

元和三年台徳院禱御上洛之時於京
都被仰仕諸大夫法名成長一中明歴
四年戌戌二月五日壽六十二

弥平大六郎即益広代より改六連錢

と為す

三十五代 信房 真田伊豆守

八幡大菩薩

四、会田村村史

海野氏の系図は、真田家に伝わるものその他種々あって正確なもの
 ははっきりしていないが、幸氏の系から会田氏らが出てゐる事は共
 通であるから此れをかかける。

赤平四郎

小太郎

小六郎

幸広

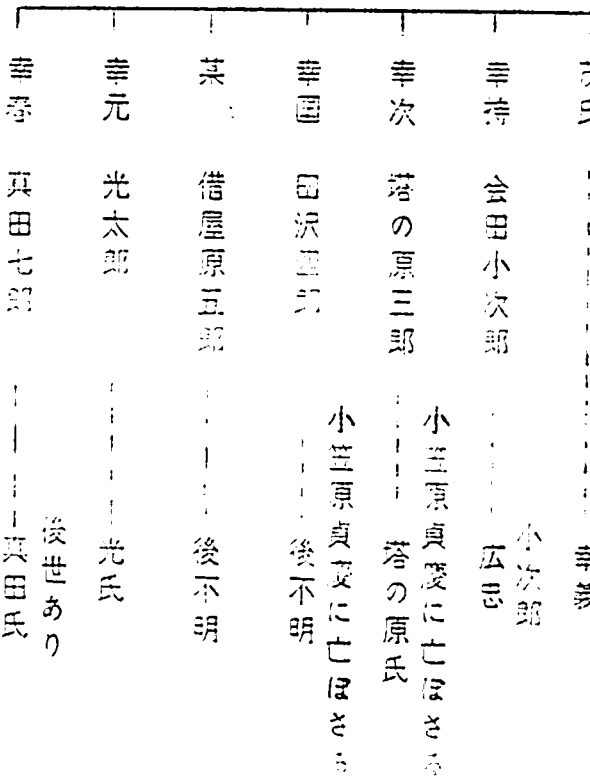
幸氏

幸次

幸氏

村上氏らに亡ぼさる
幸義

木曾義仲の軍に属し 義仲の長子義高
 備中国水島の海戦に について鎌倉に
 木曾軍の大將として 質となる
 出陣戦死



海野の本家を
継ぐ

五、日本城郭全集（長野編会田坂）

○虚空蔵山城（四賀村会田虚空蔵山）

海野小太郎幸繼の二男幸持より数代居住、応永年間に断絶したと云う。以後岩下氏が城主となる。数代続き小笠原長棟長時に仕える。天文二十二年（一五五二）武田勢に攻められ落城す。

○覆盆子城（四賀村召田）

海野小太郎広政の三男召田監物が城主であったが、天文二十二年（一五五二）武田に攻められ落る。

○矢久砦（一期の城）

会田より数キロ小県郡よりの矢久の地に砦を構えて一期の城と言つてこもる。天正十二年（一五八三）十一月三日小笠原貞慶に攻められ落城。其時城主会田広忠幼少により城將堀の内三左衛門（越前守）は、小県郡からの援軍多数と共に戦つたが、討取られる。城主会田広忠は小県郡青木に脱れ五輪の尾根の山小

屋にて自害してはたと伝へられている。会田氏の菩提寺法田寺の地獄に此の時の戦死者一同を葬つた会田塚が残っている。会田氏は此處に全く亡び此の地方は小笠原氏の領有と歸した。

○兩戸屋城（四賀村会田）

会田氏の出城。覆盆子城の山ひだにあつた。会田家臣小三原兵部が城將。天文二十二年（一五五三）武田に攻められ落城。

○秋吉城（四賀村小岩井）

会田氏の出城。会田氏の家臣岩下氏又は小岩井兵部利行が城將。天文二十二年（一五五三）武田に攻められ落城。

○岩淵城（四賀村鑿池）

会田氏の家臣岩淵晝後守の居城。天文二十二年（一五五三）武田に攻められ落城。

○中野陣城（四賀村小岩井）

会田氏の出城。家臣中野三三衛門が城將。天文二十二年（一五五三）武田に攻められ落城。

六、四賀村召田、天道山縁起書

滋野系圖

神皇產靈神 五世の孫 中川村召田天道山ノ祭神也

天道根命 神武天皇ノ朝 紀国造トナル

東人

大和国葛野檜原ニヨリ檜原造ト称ス 天平勝宝元年(一四一〇)駿河守トナル、姓伊藤志臣ヲ賜ル

尾張守滋野氏ノ祖

家譚

延暦年中

滋野宿禰ノ姓ヲ賜ル

貞主

恒蔭

恒成

因幡介正六位下

賜始滋野朝臣姓

貞雄

弘仁年中二

左馬権助正六位下

信濃介

信濃守

信濃守

信濃守

信濃守

幸俊

幸空

幸明

幸真

幸盛

幸家

天歷四年

天延元年九月

海野庄ノ下司トナル

小泉郡川西郡 二住ス

望月三郎

根津小太郎

望月三郎

直家

重俊

小泉郡川東郡

北佐久郡西郡望月

根津 二住ス

二住ス

信濃守

小太郎

小太郎左衛門尉

壽永二年

幸勝

幸親

幸広

幸氏

幸繼

幸春

七郎左衛門尉
信濃守

保元ノ乱ニ

木曾義仲但利加

弓馬ノ四天

義朝ニ属シ

羅峠ノ戦ニ参加スル

王ノ一人

京ニ上ル

蔵人

頼朝ニ仕ヘル

覚明

吳福寺の学 トナリ

親鸞ヲ補ケテ真宗ヲ

広メ帰国シテ更級ニ

康宗寺ヲ刻ス

幸春

海野小太郎

幸持

会田小次郎

虚空蔵山城ヲ築ク

幸次

塔ノ原城ヲ築ク

塔原三郎

幸國

田沢四郎

田沢山ニ城ヲ築ク

某

麩屋原五郎

鷹住根山ニ城築ク

幸元

光ノ六郎

光仁場ニ城築ク

女

赤木兵部丞の妻

七、静岡会田出羽家系図

先祖は

人王五十六代 号菊宮

清和天皇 — 貞保親王 —

基淵王 —

善淵王 —

滋氏三 —

為氏

信濃守從四位下

從三位中納言

信州守護 武藏守從五位上

為通 — 則広 —

弥平大夫

重通

海野小太郎

広道

海野小大夫權守

幸道

海野小太郎

幸親

住居信濃国小県郡海野邑故子孫号海野

左馬頭義朝二屬シ度々軍攻有

海野弥平四郎

幸広

海野

小太郎左衛門尉

幸氏

海野

右衛門尉

長氏

海野小太郎

茂氏

信濃守從五位下

会田次郎

幸持

左衛門尉

壽永二年討死於平備中本島

馬ノ達人也弓ノ達人也

信州海野庄

信濃国会田郡故号会田入

哉平教経

真田七郎幸春

真田左近大夫

則幸

海野小太郎

幸強

菅原三郎幸盛

田沢四郎真氏

借屋原三郎氏則

女子赤木兵部丞

清田六郎光之

会田小七郎 会田小太郎 会田次郎
 左衛門尉 信濃守 左衛門尉飛騨守
 幸崇 長崇 義重
 兼倉二住又 兼倉二住又
 会田兵衛太郎 左近允
 盛重
 天保元弘三年 父歿死ノ時幼少
 三月七日歿死 存兼倉云云
 重晴
 会田信次郎 出羽介

会田五郎右衛門尉 兵衛大夫
 宗清
 明徳三年八月二十八日 宗清小笠原信澄守長秀二屬又
 会田 会田太頭 会田小次郎 会田 会田小七郎
 將監 右衛門尉 治左衛門尉 中務丞
 清信 信守 幸清 時信 幸盛
 小笠原大膳 大永享祿之間
 大太尾宗清 幸盛軍功有
 長朝一族軍人其 爲信清浪人又

会田小七郎 將監
 幸久
 長時終為信玄失利干 時避旧領信州而上京 從足從士悉流浪云云 至弘治初属北条氏康 氏政父子
 会田 中務丞 信清
 属北条殿而領於 武州之内也葛西 小岩他
 松寿丸 某 二千代 某
 会田出羽 会田 会田
 七郎右衛門
 会田又六 五郎兵衛 会田 資勝
 会田伊右衛門 資刑
 会田 小左衛門 小左衛門 資盛
 会田 資忠 会田源兵衛 貞房

父將監伴用信州至 武州越ヶ谷居住干 此所

八、四丁野会田太郎兵衛家系図 (日拝帳より)

会田八郎左衛門先代

道運禪定門

寛永六年二月二十日卒

会田七郎兵衛先代

善心禪定門

正保三年十一月二十四日卒

父八八郎左衛門也

夏月浮散清信士

寛文九年五月二十八日卒

先代

妙蓮清信女

明暦三年六月十四日卒

慶秋禪定尼

万治三年九月十四日卒

先妻

花屋妙香尼

寛文三年五月二十二日卒

奥安党性信士

貞享四年五月二十六日卒

初代太郎兵衛

二代傳次郎 太郎兵衛嫡男

徹通圓翁清信士

明和八年正月十八日卒

櫻菰妙善清信女

元禄十三年二月十七日卒

先代

松寿高崇清信女

寛保四年正月十一日卒

芳林智盛清信女

享保九年四月二十日早世

当屋鑑初代妻

当家御取立之祖也

二代太郎兵衛ノ妻

清右衛門新田田中八右衛門娘

秋光崇繁清信女

寛保二年三月四日卒

二代目太郎兵衛後妻

草加在立野より来ス

三代太郎兵衛崎男俗名太吉郎
華月円興清信士

寛保三年七月二十七日卒 25才

四代太郎兵衛俗名傳次郎
觀阿淨拳清信士

文化十三年五月六日卒

五代目太郎兵が父

沐林恵光清信女

寛政元年七月九日卒

三代目太郎兵衛ノ妻 59才

北谷村田中左平太の娘

証故妙譽信女

天保十一年十一月二十九日卒

傳次郎妻俗名みき

清右衛門新田田中八右衛門娘

五代太郎兵衛傳次郎玄海

乘運院涼然子空居士

二十一日卒

六代目太郎兵衛俗名勝重
滋村仁沢居士

寛政四年五月一日卒

角太郎の父

七代目太郎兵衛俗名角太郎
耕稼院温恵重義居士

安政六年七月十五日

赤山領清右衛門新田田中急吉
春林院の子傳次郎様ナリ

覚阿子呼清信女

天保七年六月六日卒 59才

五代目太郎兵衛妻俗名お多福

松伏村吉田長左衛門娘

習照妙尊清信女

文政四年六月二十三日卒

角太郎妻早世

田中八衛娘

貞泰院胎田高證大姉

慶応三年八月十三日卒

角太郎後妻とよ

二合半領彦成村谷中藤五郎娘

八代目太郎兵衛

忍慶院止弁快涸居士

明治九年八月十七日卒 49才

母は二合半領合谷田元二郎方より来る さだ子

三十六代俗名本太郎

九代目太郎兵衛

高照院頼本覚道居士

昭和六年一月二日卒

三十七代

十代目太郎兵衛

正徳院悟山義道居士

昭和三十六年九月五日卒

本太郎六男俗名義盛 57才

遠証理覚大姉

明治四年二月二十九日卒 39才

太郎兵衛妻本太郎母分也辰新

足立郡峰分田中道真方より

三人目

寿照院妙琴和道大姉

昭和三十七年二月十二日卒

会田本太郎妻 コト

会田義盛の妻

会田香子

生存

九、氏姓辞典 滋野氏三家系図 (滋野・海野・真田)

清和天皇 — 貞保親王 式部御号南院宮

母一条后

貞観十年生

延喜二年四月十三日薨

菊宮トモ云フ

昌高王

母嵯峨第四推原親三女

從三位

善端王

延喜五始賜滋野姓

母六納言源昇輝の女

院判官代
 從五位下 信濃守
 号三寅大夫 左衛門督 武藏守 野平三太夫 海野小太郎 小太郎
 滋氏王 為広 為通 則広 重道 幸道 幸親
 母大政大臣基經女 宗直 宗直 保元ノ乱ノ
 時左馬頭義
 朝ニ味方ス

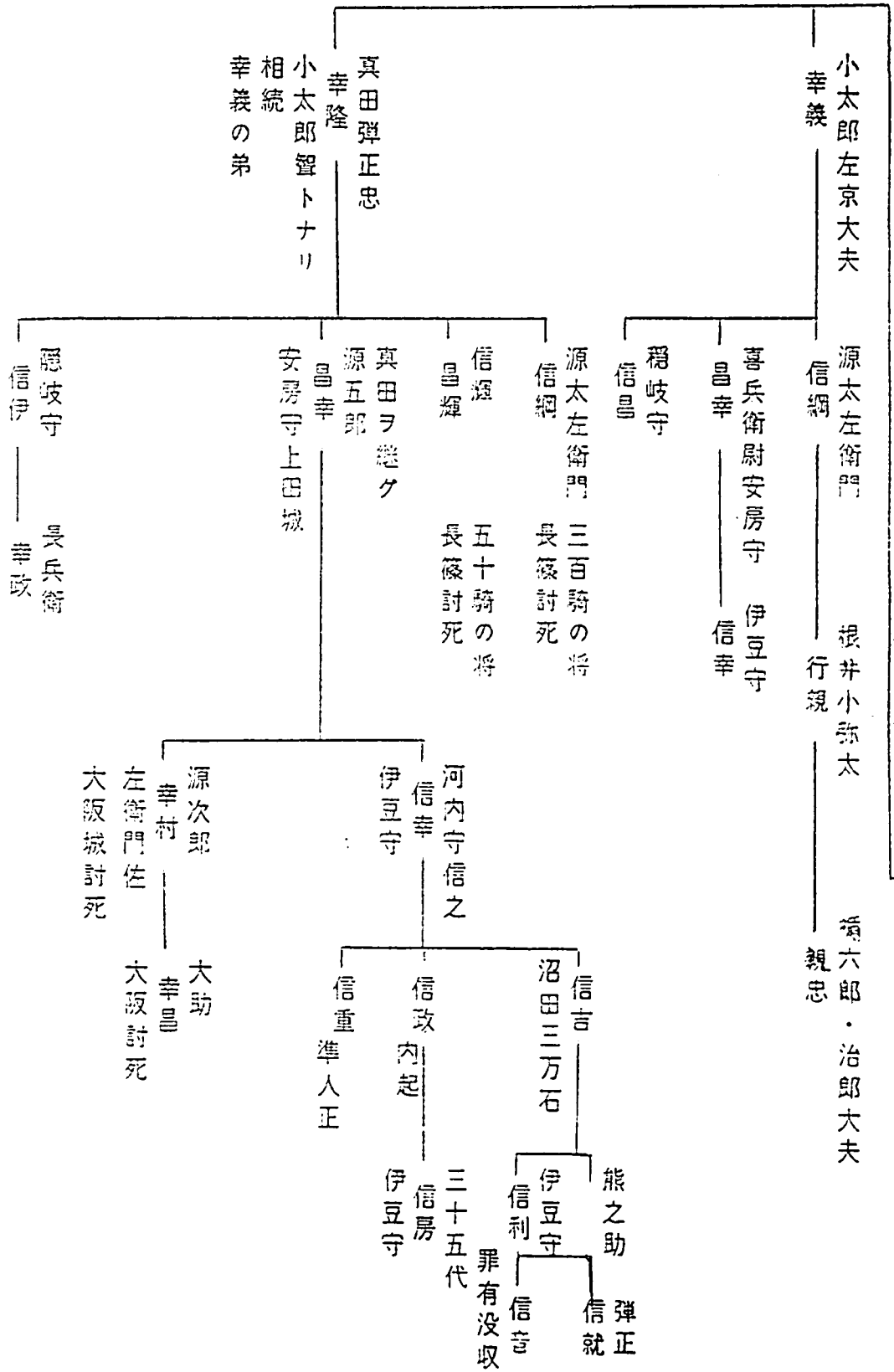
彌津小二郎
 道直 貞直 宗直
 望月三郎
 広重 國重 國親

野平四郎 兵衛尉仕ス左衛門尉 海野小太郎 海野右衛門尉 信濃守 海野左衛門尉 小太郎
 海野弥平大夫 幸氏 長氏 及氏 幸直 信濃守 頼幸

幸広 志水冠者義高伴ヒテ 鎌倉ニ下向頼朝ニ海 野本頼ヲ賜ル 弓名人也

左近大夫 彈正忠二位 新左衛門尉 小太郎 太郎鎌倉ニテ元服 太郎鎌倉ニテ元服
 則幸 善幸 善房 幸義 憲広 持幸
 笛吹峠合戦宗良 親王の味方

小太郎 信濃守 小太郎信濃守
 氏幸 幸棟 棟綱



十、氏姓辞典（シゲノ）

二七三九頁

滋野氏系図

紀ノ國造

駿河守天平勝宝元年任

神魂命
天造根命
東人

五世ノ孫

正五位下伊蘇志三性賜ル

大学頭兼博士号名譽大和
國増原造卜ナリ増原称ス

滋野宿禰
從五位上

滋野朝臣延明弘仁十四年行宮
内卿兼相模守任正四位下

家

貞主

延曆十七年同姓賜

滋野朝臣從四位下

百十四代

貞雄

仁明天皇々記

貞觀元年十二月卒

百十五代

貞雄

文德天皇々記

貞雄

文德天皇々記

岑子

真子

海野小太郎

幸明

海津小次郎

直家

信濃守
恒盛

因幡守
恒成

左馬權介
幸俊

信濃守
幸経

望月三郎
重俊

望收監

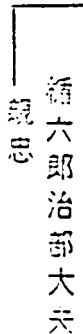
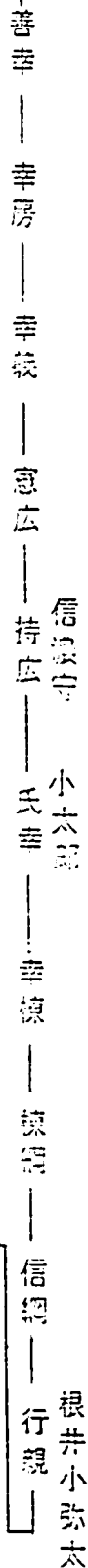
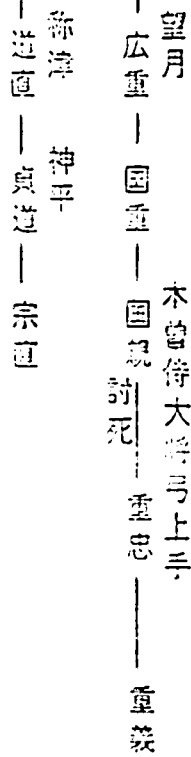
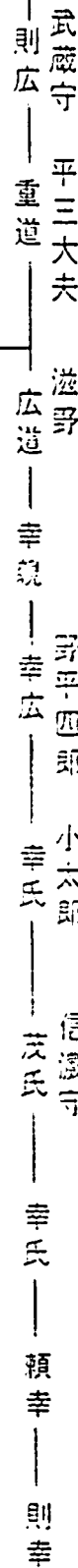
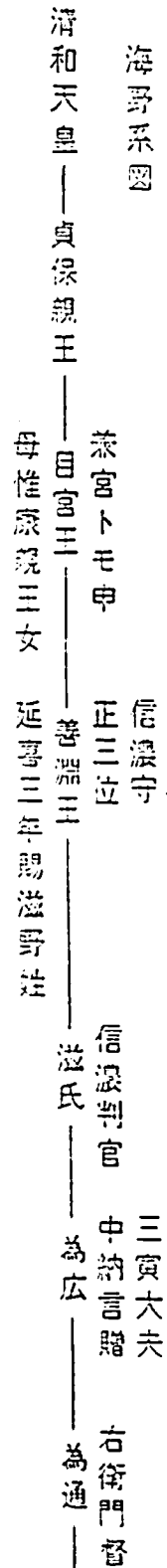
海野庄下司

望月ノ祖

十一、氏姓辞典（ウムノ）

七四〇頁

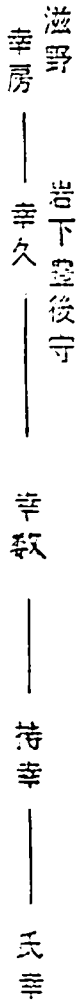
海野系圖



十二、氏姓辞典（イハシタ）

三二二頁

滋野氏三家系圖 家紋 丸に抱石可也



十三、岩下氏系図（小県郡（小県郡史引用系図））

豊後守

幸久——幸持——幸邦——幸繁——政幸——清幸——幸実——幸広——幸紀——幸景

源介

注 広田寺系中岩下豊後守と有る

十四、寛永諸家系譜伝会田

資清

出羽

生国 武蔵

岩の城太田下総守に属す

資久

出羽

生国 同前

資勝

三七郎

生国 同前

大権現につかえたてまつる

資久

七郎右衛門

生国 同前

資信

小左衛門

生国 同前

將軍家につかえたてまつる

十五、寛政重修諸家譜（旗本会田家系図）

会田

今の皇譜に、滋野氏にして弥平大夫重道、信濃国小県郡海野村に住せしより祿号とす。其後裔左衛門尉幸持同国会田郷に住住し、家号を会田にあらたむ。資清はその末孫なりといふ。按ずるに滋野氏真田の譜に、海野会田を祿するものあれども、いはゆる重道幸持見るところなし。

資清

出羽

太田下総守某に屈す

資久

出羽

北条家につかへ、天正十八年かの京没落のち武蔵国越谷に住す。そのうち東照宮越谷に放廢したまふとき、資久が宅地のうちに御殿等を営ませたまひ、後しはしは御御ありて物を貯ふ。そののち台徳院殿（秀忠）もしはしは成せたまふ。後下野国宇都宮に御座のとき、御をうけて間道を導きたてまつり、慶長十三年五月十八日豊敷地として畑一町歩をたまはるのむね、伊奈備前守忠次より書ををくる。元和五年七月十六日死す。法名道光。越谷の天吉

寺に葬る。

資勝

庄七郎 母は某氏。

東照宮につかえたてまつる。

今の皇譜、資久が長男を七郎右衛門資重とし、台徳院殿（秀忠）六ヶ院殿（家光）越谷にならせたまふのときまみえ奉り、正保元年七月二十七日死す。法名道盛といひ、二男を庄七郎資勝とし、台徳院殿越谷御殿に渡御のとき、めされて側小姓となり、のちゆへありて本多伊勢守忠利にめしあづけられるといふ。家傳略委しといへども、寛永系圖に異にして、外証もなきにより、根に參考してこれを補ひがたし。うていささかここに録す。

資重

七郎右衛門 母は某氏

行重

限右衛門 實は美田三左衛門勝重が五男。資重が養子となり、のちゆへ

ありて家に帰る。

資信

虎之助 小左衛門 母は某氏

大猷院殿（家光）につかへたてまつり
大番をつとめ、米三百俵をたまひ、
寛永十年二月七日新恩二百石をたまひ
これまでの米な采地にあらためられ
る。武蔵国埼玉郡のうちにまいてすべ
て五百石を知行す。慶安二年六月二十
八日死す。法名浄頓。牛込の六信寺に
葬る。

資忠

又六 越谷に住し子孫民間にあり。

資盛

虎之助 小左衛門 母は某氏。

慶安二年十二月十四日遺跡を継小普請
となり、寛文四年十一月十八日大番に
列し、元禄八年四月十九日大阪の御弓
矢奉行に転じ、寛永三年十二月務を辞
し、四年九月五日死す。法名日清。牛
込の圓福寺に葬る。妻は館林の家臣楯
原七右衛門政勝が女。

資刑

牛之介 伊右衛門 政仕号退翁
母は政勝が女

寛文十二年二月二十一日はじめて蔵有
院殿（家光）に拝謁す。時に七才天年
三年九月二十五日大番に列し、元禄二
年間正月二十一日桐岡番にうつり、三
月十五日大番に復し、寛永四年十月二
十七日遺跡を継、正徳五年五月二十七
日御代官に転じ、享保十七年六月二十
六日職を辞す。元文五年閏七月二十五
日致仕し、寛保元年九月八日死す。年
七十六。法名秀道。葬地資信に同じ。
妻は飯室典兵衛昌繼が女。後妻は甲府
の家臣飯塚七郎兵衛政侍が女。

昌教

友之進 坂花検校喜津一が養子

安英

弥十郎 莊九郎 花井久右衛門定賢が養子

女子

竹内平右衛門信秋が妻

資敏

勝之丞 伊右衛門 母は政侍が女

元文五年閏七月二十五日を機、十月晦

日大番に列し、寛延二年六月二十三日御代官にうつり、安永五年十月二十六日石見国大森の官舎にをいて死す。年五十九。法名道忠。かの地の勝源寺に葬る。妻は羽大権兵衛正員が女。後妻は森惣右衛門種雅が女。

昌興 六三郎 友之進 板花友之進昌教が養子。

資益

元次郎 伊右衛門 実は金田弥左衛門正祥が二男 母は蓬田左大夫光常が女。資敏さきに男子ありといへども、父にさきだちて死するにより養子となり、其女を妻とする。

寶曆十年四月二十八日はじめて博信院殿（家重）にまみえたてまつり、安永

六年四月六日遺跡を継。時に四十四才菜地五百石天明二年二月四日大番となり、寛政十年十一月二十一日番を辞す妻は資敏が女。

女子 資益が妻

某 勝之丞 父に先だちて死す

女子

女子 伴野平次郎貞真が妻。

資昌 金三郎 母は資敏が女。

天明二年七月朔日はじめて、浚明院殿（家治）に拝謁す。時十九才。妻は青山丹下幸延が女。

女子 加藤左衛門照英が妻。

資勝 門三郎

家紋 丸に三本竹 二巴

十六、寛政重修諸家譜（滋野氏真田）

滋野氏

真田

はじめ海野を称し、彈正忠幸隆がときにより、信濃国真田の庄に住せしより称号とす。

寛永系図に、二人相つたへて信濃国海野白取大明神を滋野氏の祖いはひたてまつるといひ、また貞秀親王を滋野天皇と蓋し、いにしへより真田の氏神と称し、今にこれをあがむ。或はいはく、貞秀親王ののち滋野の姓をたまふものかといへり。今の呈譜は清和天皇第五の皇子貞保親王の御子を目宮とし、其子善淵王はじめて滋野の姓をたまふといふ。今按ずるに、寛永系図或は貞秀親王ののち滋野氏を賜ふものかとうたがひ今の呈譜は善淵王にはじめて滋野を賜ふといふ。又ある本の系図にも、善淵王の時滋野姓を賜ふとみえたり。しかりといへども撰姓氏録によるに、滋野宿禰は神魂命五世の孫天逆根命ののちなりといふ。これによれば滋野は神別にして皇別にあらず。また文徳実録に、仁寿二年參議滋野朝臣貞主が傳に、父尾張守家新に延暦年中滋野宿禰の姓を賜ひ、また仁寿二年十二月六外記名草宿禰安蔵に滋野朝臣の姓を賜ふ等の事みえたり。これによる時は滋野氏のおこりす

卷第六百五十四

に久し。しかれども清和の皇別といふにいたりては、新古の系図其説をおなじうす。よりてこれにしたがふといへども、寛永の譜清和の皇子を貞秀親王とし、其男を海野小太郎幸恒とす。貞秀親王紹運録其他皇裔の系図等に考る所なし。又親王の子をもつて小太郎と称するも不審といふべし。これ全く其間の世系を脱せしならむ。よりて今あらためて幸恒より系を興す。

幸恒 小太郎 海野を称す

幸明 小太郎

直家 小太郎 碓津を称す

重俊 三郎 望月を称す

幸直 小太郎 信濃守

幸盛 小太郎 信濃守

幸家 小太郎 信濃守

幸勝 小太郎 信濃守

幸親 小太郎

保元の乱に左馬頭義朝に属し、高名あり

幸広 弥平四郎

寿永二年備中国水嶋合戦のとき侍大将となりて戦死す。

幸氏

小太郎 信濃守 今の三譜に小太郎後左衛門尉につくる。

幸巻 小太郎 信濃守

幸春 小太郎

某 小次郎 合田を称す

某 三郎 塔原を称す

某 四郎 田沢を称す

某三五郎 借里原を称す

光之 六郎

幸重 小太郎 信濃守

幸素 小太郎 信濃守

幸遠 小太郎 信濃守

幸永 小太郎 信濃守

幸昌 小太郎 信濃守

幸信 小太郎

幸定 小太郎

幸秀 小太郎 信濃守

幸守 小太郎 信濃守

幸朝 小太郎 信濃守

幸俊 小太郎

某 豊後守 峯下を称す

幸致 小太郎

今の皇譜に、太郎源広のち信濃守につくる。

持幸

小太郎 信濃守

氏幸

小太郎 信濃守

幸棟

小太郎 信濃守

棟綱

小太郎 信濃守

幸義

小太郎 左京大夫 今の皇譜に幸義をもつて幸隆が兄とす。

信濃国にきて村上義清と合戦の討死す。

幸隆

小太郎 源正忠

信濃国真田の庄に住し、これより真田をもつて称号とす。武田家につかへ、天正二年五月十九日死す。年六十二。法名一徳斎。

頼幸 豊後守 矢沢を称す。

隆家 伊予 常田を称す。

信綱 源太左衛門 母は某氏。

武田信玄および勝頼につかへ、天正三年九月二十一日三河圍長篠の役に戦死す。年三十九。

昌輝 母は某氏。

兄信綱とおなじく長篠の役に討死す。

昌幸 源五郎 喜兵衛 安房守 母は某氏。

天文十四年信濃国に生る。武田信玄をよび勝頼につかへ、武田喜兵衛と称す。兄信綱戦死ののち其遺跡を継、天正十年武田家没落ののち東照宮に属したてまつる。

以下略

十七、氏姓辞典（オガサハラ）

小笠原系圖

清和天皇
人皇五十六代

貞純親王

經基王

号六孫王
賜源朝臣姓

清仲

頼光

頼信

鎮守府將軍

頼茂

鎮守府將軍

義家

八幡太郎

源氏頼流

義光

義業

義仲

木曾元

義清

清光

信茂

祖次郎

清光

担加々美次郎

長清

号孫二郎

賜小笠原姓 豆・托・甲・遠・波

五ヶ國管領 仁治37 延平八十一

長經

彈正少ヒツ

太郎

安房

小二原太郎

安河守頼

長忠
信乃守護

長政
信乃守孫二郎

長氏
信乃守彦三郎
伴野出羽誅セラレシ後
小笠原惣領職を領

長長
彈正少ヒツ一
從五位下遠江守

長基
彈正少ヒツ二郎
從五位下信乃守

經忠
小三郎
宗政
倍

長朝
又六郎

長匡
五郎

長康

長敬

長清
十郎

宗政
孫二郎

宗清
孫二少ヒツ孫六郎

政經
孫三郎左馬助

治部少ヒツ七郎

宗政
遠江号中川

長長

長秀

兵庫助二郎
修理大夫

持長
大膳大夫二郎

清宗
信乃守

長朝
民部大夫 二郎

貞朝
修理大夫又二郎

長棟
修理大夫
又二郎
從四位下

政康

右馬助
大膳大夫

宗康
大膳大夫

宗藏
九郎

光政

貞政
次郎大膳

安政
左衛門

秀行

三郎伯父清政
五子

政秀
兵庫助

左京大夫

宗則
近江守

六郎
左衛門佐

女子
春日氏妻

覺性
朝光寺

統最

長利
兵部少甫

長將
長義

朝康
治部少輔
長宗
左馬助七郎
女子
木曾氏妻
慶侍者
光康
遠江守六郎
三郎

政盛
左馬助

長時
大膳大夫二郎右馬助
貞慶
信定
長項太郎
清隆
女子
女子
貞種
孫一郎
統虎

女子
仁科氏妻
女子
大岡氏妻

と見ゆ。

結 び に

既刊の諸資料を見直し、その解釈や視点を変え、新たな資料を加えて、疑問点や伝承と異なる点を追求し、真実の史実を説明する事を念願として此の稿を起しましたが、今一つ資料不足の爲明確さを欠き、今一步の追求にもとかしさを感じ、研究不足を露呈する結果となりました事深くお詫び申し上げます。終りに、長野県信濃文学会理事 原喜環氏、長野県四賀村会田広田寺住職 真田忍禪氏、同村会田 花前実氏、川口市元郷 会田春子氏、越谷新町 二丁目 会田圭氏、越谷市図書館長 木村信次氏、明治大学教授 萩原繁夫氏、越谷市市史編纂委員 本間清利氏、埼玉東武地方史説明調査会長 岩井茂氏等々の皆様方の御研究御協力に負う所多大である事を心から感謝いたします。

昭和五十二年一月二十三日

越谷市歴史研究会

理事 山崎善司

昭和五十一年四月十六日

越谷市郷土研究会 発行

〒350 越谷市 山崎 善司

発行者 越谷市郷土研究会

越谷市弥生町 一ノ九

〒350 四八九(六二)三七三三

発行所 ・ 印刷所

山崎タイン印刷工業

越谷市弥生町 一ノ九

〒350 四八九(六二)三七三三